

山形城三の丸跡

第12次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第214集



2014

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



やまがたじょうさんまる

山形城三の丸跡

第 12 次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 214 集

平成 26 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山形城三の丸跡の調査成果をまとめたものです。

山形城は、山形盆地の南東部に位置する政治・経済の中心的都市である県都山形市の市街地に所在し、本丸、二の丸、三の丸が同心円状に配置された輪郭式平城です。二の丸は一辺約500m の方形、三の丸は約 1.5 ~ 2.0km の橢円形の広大な城館でした。現在、山形市が本丸を中心に復元整備を進めています。

この度、山形法務総合庁舎新営事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、山形城三の丸跡の発掘調査を実施しました。調査では、近世・近代の土坑や溝、柱穴と考えられる遺構が検出され、陶磁器や古銭、山形城の城主であった堀田氏の家紋のある瓦や山形刑務所に係る煉瓦、陶磁器など多くの遺物が出土し、当時の人々の生活が窺える多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 菅野 澄

凡　例

- 1 本書は、山形法務総合庁舎新營事業に係る「山形城三の丸跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ章を氏家信行、第Ⅱ章を山田めぐみが担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、齊藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SK…土坑 SD…溝跡 SP…ピット SX…性格不明遺構
RP…登録土器・陶磁器 RQ…登録石製品 RM…登録金属製品

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。また、遺構実測図の網点の用法は下記のとおりである。

 : 土器・陶磁器  : 焼土  : 石・礫

- 8 遺物実測図の拓影断面図の配置は土器断面実測図は左から内面・断面・外面の順に、瓦断面実測図は左から外側（上面）・断面・内面（下面）の順に掲載した。
- 9 遺物観察表において、()は図上復元による推計値を示している。
- 10 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

遺跡名	山形城三の丸跡				
遺跡番号	201-009				
所在地	山形県山形市大手町				
調査委託者	国土交通省東北地方整備局				
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター				
受託期間	平成 24 年 5 月 25 日～平成 25 年 3 月 29 日 平成 25 年 11 月 28 日～平成 26 年 3 月 31 日				
現地調査	平成 24 年 6 月 11 日～10 月 5 日				
調査担当者	平成 24 年度	調査課長 考古主幹 専門調査研究員 調査員	斎藤敏行 伊藤邦弘 氏家信行（調査主任） 山田めぐみ	黒坂雅人 伊藤邦弘 氏家信行（調査主任）	
	平成 25 年度	整理課長 考古主幹 専門調査研究員			
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 24 年） 山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成 25 年）				
調査協力	山形地方検察庁				
業務委託	基準点測量業務 株式会社工藤測量設計 理化学分析業務 株式会社加速器分析研究所				
発掘作業員	五十嵐正芳 斎藤哲雄	池田和男 鈴木明	大山眞一 富田潤	岡崎政昭 三澤國昭	小山田恵子 桃井美子 工藤誠 （五十音順）
整理作業員	安孫子道子 関東美由樹	嶋田真奈美	中嶋美恵子 堀浩子	三原朋子	（五十音順）

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概要	
1 基本層序	7
2 遺構と遺物の分布	7
IV 遺構と遺物	10
V 理化学分析	
1 放射性炭素年代測定	41
2 樹種同定	43
3 骨同定	45
VI 調査のまとめ	47
報告書抄録	卷末
遺構全体図	付図

表

表 1 遺跡地名表	6	表 4 歴年較正年代表	42
表 2 遺物観察表	35	表 5 樹種同定結果	43
表 3 試料補正表	42	表 6 骨同定結果	46

図 版

第 1 図 調査区概要図	3	第 13 図 SX3 出土遺物 2	21
第 2 図 地形分類図	5	第 14 図 遺構外出土遺物 1 (青磁・中世陶器・瀬戸美濃系陶器)	22
第 3 図 遺跡位置図	6	第 15 図 遺構外出土遺物 2 (唐津・大堀粗馬鹿器)	23
第 4 図 基本層序	8	第 16 図 遺構外出土遺物 3 (在地陶器)	24
第 5 図 遺構配置図	9	第 17 図 遺構外出土遺物 4 (瀬戸美濃・肥前磁器)	25
第 6 図 SK1・14・18・47・49・SD2	14	第 18 図 遺構外出土遺物 5 (波佐見・大堀粗馬鹿器)	26
第 7 図 SK58・59・62～65・67・82・89・98・SP75	15	第 19 図 遺構外出土遺物 6 (かわらけ・土師質土器・土製品)	27
第 8 図 SD9・61	16	第 20 図 遺構外出土遺物 7 (瓦)	28
第 9 図 SX3・23	17	第 21 図 遺構外出土遺物 8 (瓦)	29
第 10 図 SK59・64・67・82・89・98出土遺物	18	第 22 図 遺構外出土遺物 9 (石製品)	30
第 11 図 SD2・9出土遺物	19	第 23 図 遺構外出土遺物 10 (石製品・礎石)	31

第 24 図 遺構外出土遺物 11（金属製品）	32	第 27 図 历年較正年代グラフ	42
第 25 図 遺構外出土遺物 12（焼台）	33	第 28 図 炭化材組織踏微鏡写真	44
第 26 図 遺構外出土遺物 13（近代陶磁器・ガラス製品）	34	第 29 図 出土件写真	46

写真図版

写真図版 1 調査前全景・基本順序・T 4	写真図版 12 遺構出土遺物（磁器・かわらけ・土師質土器）
写真図版 2 SK1・14・SD2	写真図版 13 遺構出土遺物（陶磁器・土製品）
写真図版 3 SK18・47・49・SX23	写真図版 14 遺構外出土遺物（青磁・陶磁器）
写真図版 4 SK58・59・SP75	写真図版 15 遺構外出土遺物（陶器）
写真図版 5 SK62	写真図版 16 遺構外出土遺物（磁器）
写真図版 6 SK63・64	写真図版 17 遺構外出土遺物（磁器・かわらけ・土製品・土師質土器）
写真図版 7 SK65・67・82・RM11・15	写真図版 18 瓦・石製品・礎石
写真図版 8 SK89・98・SD9・RM16	写真図版 19 金属製品・焼台
写真図版 9 SD61・SX3・RM3	写真図版 20 近代の陶磁器・ガラス製品
写真図版 10 SX3・RQ1・9・RP2・8・RM5～7・10	写真図版 21 山形城周辺空中写真・水野三郎右衛門宅社碑
写真図版 11 調査区完掘全景	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

山形城は、最上義光が整備したといわれる平城で、東西1,480m、南北1,881mの範囲が遺跡として登録されている。本丸、二の丸と三の丸の一部は昭和61年に国史跡指定を受けている。

遺跡の発掘調査は、山形市教育委員会、財團法人山形県埋蔵文化財センター（現「公益財團法人山形県埋蔵文化財センター」）によって行われてきた。

城南一丁目遺跡、双葉町遺跡の調査や山形県埋蔵文化財センターが実施した三の丸跡の平成14年～16年の第1～3次調査、平成20年～23年の第4～9次調査では掘立柱建物跡、井戸跡、柵列や三の丸東側の堀跡の一部が見つかるなど、大きな成果をあげている。

平成24年度には、山形市教育委員会によって、本丸西堀整備事業に伴う調査が実施され、保健福祉センター東棟事業に係る第10次調査、国道112号震城改良事業に係る第11次調査が山形県埋蔵文化財センターにより行われている。

今回の調査は、山形市大手町にある山形法務総合庁舎の老朽化に伴い整備を行う「山形法務総合庁舎新営事業」に係る山形法務総合庁舎の敷地内の発掘調査で、山形城三の丸跡の第12次調査となる。

この場所は、古地図や東側を走る県道18号線に建立されている石碑から、かつて山形城の家老、水野家の屋敷が存在した場所であったとされている。

平成23年6月に山形県教育委員会が試掘調査を行い、トレンチ2本を設定して掘り下げたところ、深さ約90cmから瓦、磁器、擂鉢など、近世の遺物が出土し、その地層は安定しており、後世の攪乱は受けていないと判断された。

そのため、国土交通省東北地方整備局營繕部計画課、山形地方検察庁会計課、山形県教育委員会などで協議が行われた。その結果、国土交通省東北地方整備局から山形県埋蔵文化財センターが委託を受け、記録保存を目的とした緊急発掘調査を行うことになった。

2 調査の方法と経過

<発掘調査>

調査に先立ち、平成24年6月1日に国土交通省東北地方整備局、山形地方検察庁、山形県教育委員会、山形県埋蔵文化財センターによる平成24年度山形法務総合庁舎埋蔵文化財発掘調査に関する調整及び打ち合わせを行い、掘った土を置く場所を確保するため、西と東に分けて調査を行うことや、調査を実施する際の留意事項などを確認した。

現地での調査は6月11日から開始した。最初に西側調査区の範囲を設定し、それに沿って線掘りを行うとともに、6月13日から6月18日の期間で、重機により遺物が出土した深さまで表土を除去した。

6月22日に委託業務による基準点を調査区の周辺に設置し、それを基に3m×3mを1単位とする調査用方眼（グリッド）釘を設定した。グリッドは、第1～9次調査の設置方法を準拠し、山形城全域を囲むように南北をX軸（南から北へA～Hの8等分）、東西をY軸（西から東へA～Gの7等分）とし、1グリッド300m四方の大グリッドを南から北へ00～100、西から東へ00～100の3m四方の小グリッドに分割した。今回の調査区は大グリッドの「F E」に含まれる。

西側の遺物確認面の面削りを行っていたところ、遺物の出土はあるものの、遺構が検出されないことから、3ヶ所のトレンチを設定して掘り下げた。その結果、大量的瓦や陶磁器片と共にガラスやトタン、ビニールなども出土し、西調査区の約2/3が深さ2.0m以上の攪乱を受け遺構が破壊されていることが判明した。詳細は不明だが、昭和37年まで建っていた山形刑務所の影響かと思われる。さらに、試掘調査で攪乱を受けていないと考えられた深さ90cmの地層も同じ状況であることから、後世の埋め土であることが確認された。トレンチ調査の結果、遺構の確認面は地表下約1.6～1.8mであること分かった。そこで、西側調査区の東側1/3を再度7月6日に、重機で約1.8mの深さまで埋め土を除去し、

遺構を確認するための面整理作業を7月11日まで行い、その後、遺構に登録番号を付して精査作業と遺構平・断面図の作成や写真撮影を行った。遺構の精査は覆土をペルト状に残す、または半裁て掘り下げ、上層の写真撮影、断面図作成、覆土観察の後に完掘した。

遺物は、礎石、土製品、金属製品などについて登録番号を付し、他は遺構毎、グリッド毎に取り上げた。西側の調査は7月31日に終了した。

翌8月1日から、重機を使用して調査が終了した西側を埋め戻すと同時に東側の表土除去を行った。表土の深さが当初予定の約2倍になったため、西側に東側の表土を全て置くことができないところから、一部の表土は残し、東端の調査が進んだ時点で最後の表土を除去することとし、8月10日に終了した。東側の表土除去と併行して、北東のT4の調査を行った。T4は、事前に行った手掘りによるトレンチ調査の結果、深さ2.1mまで攪乱を受けていることが確認されていたので、重機で表土を除去し、遺構が残っていないことを確認した後に、平・断面図と写真を撮影して終了した。

東側についても西側と同様に、遺構を検出する面整理作業と併行して遺構に登録番号を付し、検出図面や、検出写真の撮影、グリッド設置などを行った。そして、土置き場を確保するため、東端部の遺構から先に精査を開始した。

9月3日には、東端の遺構精査及び記録作業が終了した。そこで、9月5日から9月7日に最後に残った東側の北部の表土除去を行い、東端の調査終了部に土を置いた。

表土除去終了後、中央部の面整理作業を行い遺構検出した。個別と全体の検出写真を撮影した後に、遺構の精査と併行して平・断面図の作成、写真撮影などを進め完掘した。

調査も終盤に近づいた10月3日に、東北地方整備局と山形地方検察庁へ調査成果の説明と、調査終了後の用地の引き渡しについての打ち合わせを行った。

そして、10月5日に機材の撤収を行い調査を終了した。現地調査は、6月11日から10月5日までの実働80日間実施した。

< 整理作業 >

調査が終了した後、10月中は調査員のみで、平面図や断面図の整理及び写真の整理などを行い、11月から整理作業員を雇用しての作業を開始した。最初に、出土遺物の基礎整理を行った。

遺物の基礎整理は、出土遺物の水洗いをし、その後に遺跡名や出土地点などを遺物に書く注記作業を行った。

注記は遺跡名「山形城三の丸12次」と出土地点「遺構名やグリッドなど」を明記し、現場で登録したものには登録番号を付した。金属製品は、洗浄は行わず、乾いた土をブラシや竹串で落とし、登録番号や出土地点を明記した袋に入れた。また、今回の調査で出土した炭化物や骨のなかで状態の良いものを抽出して、樹種同定と年代測定、骨種同定の理化学分析を業務委託した。

修復作業は、瓦、陶磁器、ガラス等に分類した後、遺構ごとに接合を行い、さらに遺構周辺のグリッド遺物との接合を行った。

接合終了後、遺構出土遺物と登録遺物を中心に状態の良いものや近世のものを主に抽出した。また、大量に出土した瓦については種類別に完形や完形に近いもの、家紋などがあるものを主に抽出した。

抽出した遺物は実測を行い図面を作成した後に、底部や表裏面の拓本を採り、遺物観察表の作成を行った。遺物の整理作業と併行して、遺構図面の作成を進めた。遺構の平面図と断面図を整合させた後、デジタルトレースをして遺構個別図を作成し、断面の上層注記と共に編集を行った。

遺物実測図はその後デジタルトレースを行い、拓本と組み合わせて編集を行った。

遺構写真是現場で撮影したなかから報告書に掲載するものを抽出した。遺物は、欠損箇所を部分的に補填する作業をした後に、単体または集合での写真撮影を行い報告書に掲載する写真を選別した。

その後、遺構図版・遺物図版・遺物観察表・写真図版の版組を順次行い、平成24年度の整理作業は終了した。

平成25年度は、本文・観察表・図版・写真図版の編集、構成と共に原稿執筆を行った。その後、原稿の校正を行い、報告書を印刷・刊行した。



市道 1146 号線



第1図 調査区概要図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

山形城が所在する山形市は山形盆地の南東部に位置する。山形盆地は東側を蔵王山から御所山に連なる奥羽山脈に、西側を白鷹山等の白鷹丘陵に囲まれ、南北約40km、東西約20kmの舟底型を呈する内陸盆地である。

蔵王山系を源流とする馬見ヶ崎川が南東から北西方向に流れ、盆地南東部に馬見ヶ崎川扇状地を形成した。山形城はその扇央部から扇端部にかけて築かれた。

山形城跡は、現在の霞城公園である山形城本丸・二の丸跡、及びそれらを囲う三の丸跡を含め、東西1,553m、南北1,617mに及ぶ広大な敷地面積を持つ。また、羽州街道、笹谷街道、六十里越街道の交叉する交通の要所に城下町が発達し、山形市街地の基礎を築いた。

2 歴史的環境

延文元（1356）年に羽州探題として赴任した斯波兼頼の築城が山形城の始まりと伝わる。11代当主最上義光の時代（16世紀末～17世紀初頭）に三重の堀を構えた輪郭式平城に改修された。最上氏は慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦後に最上地方、庄内地方も含め石高57万石と領地を拡大したが、元和8（1622）年には御家騒動により改易となった。次いで入部した鳥居氏が最上時代の縄張り図をもとに本丸・二の丸の改築や、城北の馬見ヶ崎川の流路改修工事を行い、城内外を整備した。

その後、山形藩は11氏もの領主が短期間に交替を繰り返し、石高は減少の一途をたどった。広大な敷地の維持が困難になると三の丸は次第に荒廃し、18世紀後半には家臣の長屋があった東側以外の大部分が売却され、畠地化したといふ。

廃藩後、山形城は廢城となり、三の丸の堀は埋め立てられて市民に開放された。三の丸の東側には学校、病院等が建設され、市街地化が進んだ。明治26（1896）年には本丸に陸軍歩兵三十二連隊が誘致され、終戦まで陸軍施設として利用された。

今回の調査区は現大手町の法務総合庁舎敷地内に位置

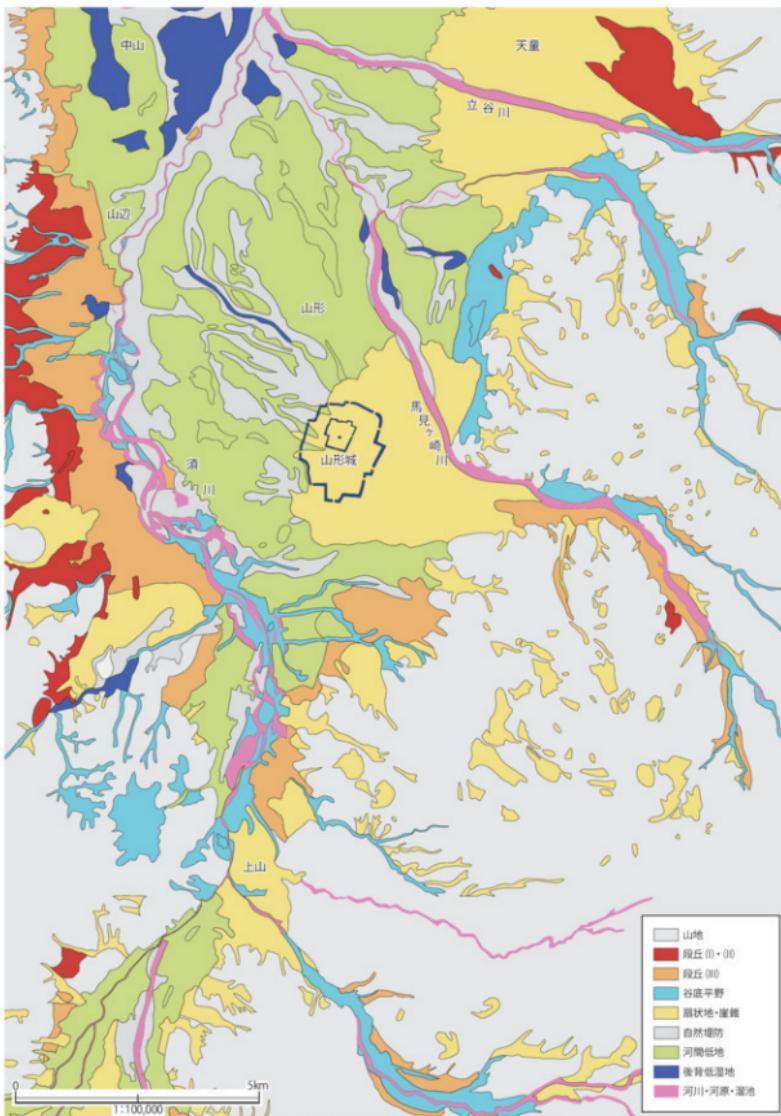
し、南に最上義光歴史館、西に山形税務署、山形美術館が隣接する。この一带は、各種史料から幕末期の家老水野三郎右衛門の邸宅跡として知られている。三郎右衛門は、戊午戦争時に最高責任者として処刑された藩唯一の人物である。江戸の藩主に向けて、家臣団の助命を嘆願した直筆文書が豊烈神社に所蔵されており、郷土の偉人として塑像が建てられ、今も市民に慕われている。

現存する城下絵図を参照し、調査区に関して江戸時代初頭から概観する。「最上時代山形城下絵図（本）」によると、最上氏の時代には初代斯波兼頼の菩提寺である光明寺があり、調査区周辺は光明寺に隣接する侍屋敷であった。その後、鳥居氏の時代に光明寺は城外に移され、享保10（1725）年頃の絵図（堀田正孝氏所蔵）では調査区該当地に「三の丸御殿」があり、周囲に「御用屋敷」が建ち並んでいる。18世紀前半の時点ですでに藩に関係する建物が建てられていたのだろう。

弘化2（1845）年の水野氏の入部に伴い、先述の通り家老水野三郎右衛門の邸宅地となった。「八幡石の小路に面して玄関があり、邸内は広く旧刑務所正面玄間に及び、そこに鍵形の池があつて（中略）」と、山形市史（1975）に記される。水野氏時代の城下絵図にはその大きな屋敷地と西側の馬場が描かれているが、周囲の大部分は畠地になっており、先述の通り三の丸の荒廃した状況が見られる。

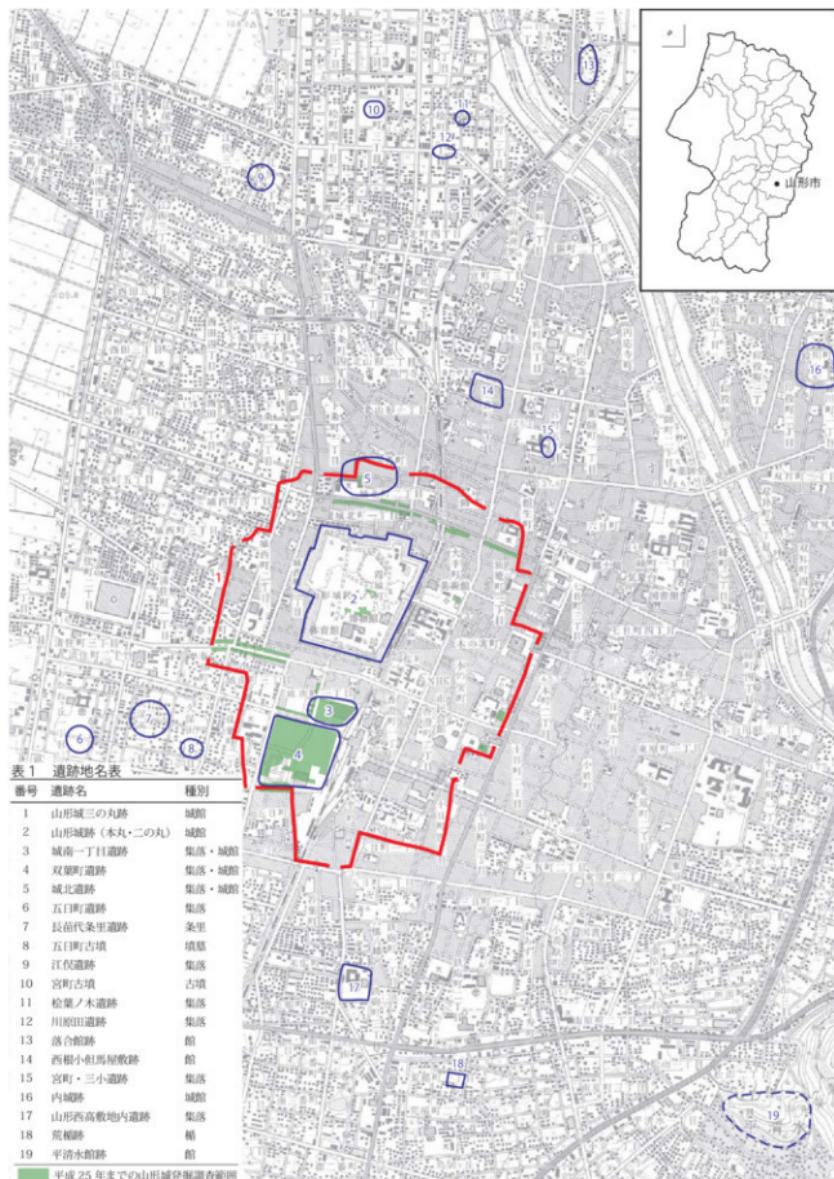
三郎右衛門の処刑後、その邸宅地は官に接收され、明治10（1877）年に山形監獄署の獄舎（後の山形刑務所）が建設された。昭和31（1956）年米軍撮影の空中写真（写真図版21）で敷地内に建つ刑務所の建物を確認できる。昭和37（1962）年に刑務所が市内漆山に移転した後、昭和42（1967）年、跡地の北東の一画に山形法務総合庁舎が建設され、現在に至る。

以上の通り、調査区周辺は三の丸のなかでも二の丸東大手門に近く、立地条件が良好であった為、江戸時代後半には藩の重臣の邸宅地として、明治時代以降には監獄舎（刑務所）、法務総合庁舎と公的施設の敷地として利用してきた。



※本図は「土地分類基本調査 山形」(山形県企画調整部土地対策課 1982)、同じく「赤堀・上山」の「地形分類図」を合成し、加筆したものである。

第2図 地形分類図



第3図 遺跡位置図

※国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」・「山形南部」を使用

III 遺跡の概要

1 基本層序

調査区内3ヶ所で層序を確認した。a-a'は、調査区中央FE11-90グリッド付近で15層に細分された。

I～X I層は後世の埋め土と考えられる。I～IV層は敷き砂利による現代の整地層で、V～X I層は、瓦、陶磁器などと共にガラスなどの瓦礫が混在することから、近代の整地による埋め土であると考えられる。概ね、黒褐色シルトの土で炭化物と多量の礫を含む。X II層で遺構が確認でき、地表下約1.5mを測る。炭化物や小礫が混じる黒褐色のシルトである。X III層は暗褐色シルト、X IV層が黒褐色の粘質シルトの土で、炭化物を多く混入し、二次堆積の土とも考えられる。X V層が粗い砂の層で地山の土と考えられ、多量の礫が混入する。

b-b'は調査区の北東側FE13-96グリッド付近で確認した。地表下約1.4mのVI層までが近・現代の埋め土と考えられた。VII層が地山と思われ、遺構の確認面となる。層位は概ね、暗褐色、黒褐色のシルトと褐色の砂やシルトに大別され、さらに9層に細分できた。埋め土と考えられるVI層までは炭化物や礫を多く含み、V層には焼土粒が混じる。VII層以下は砂質のシルトや砂の層で、ほぼ均質である。IX層の下位には人頭大の礫が含まれる。

c-c'は北東端のT4で確認した。地表下約2.0mまでが埋め土で、遺構は確認されなかった。

層位は7層に細分された。I～III層は現代の整地層で礫、碎石を含む。IV～VI層は近代の整地と考えられ、陶磁器やガラス、瓦片などが出土する。概ね、暗褐色と黒褐色のシルトで固く締まる。地山と思われるVII層にはぶい黄褐色の粗砂で人頭大の礫を多く含む。

各層序の様子から、今回の調査区は、昭和37年まで建っていた刑務所や、その後の法務総合庁舎の工事などの影響からか、近・現代の攪乱が認められ、一気に埋められた様相も見られた。遺構の確認面までの深さは1.4～1.8mを測る。

2 遺構と遺物の分布

調査では、土坑、溝跡、ピットなどの遺構が検出され、陶磁器、瓦、古銭、石製品などの遺物が出土した。その分布の状況について以下に述べる。

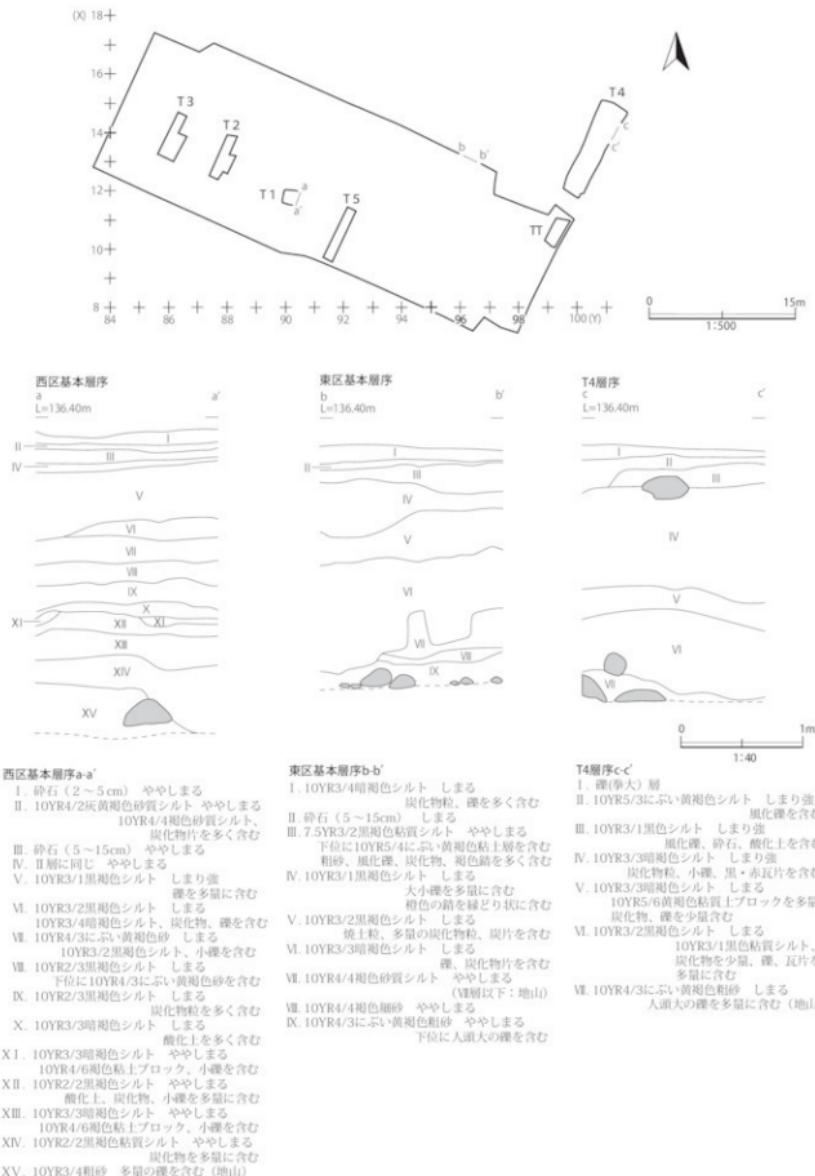
遺構は、調査区に多くの攪乱が認められ、遺存状態は悪い。その分布は、調査区の西側約1/3が周縁の溝掘りやT2・3のトレーナによる確認の結果、2.0m以上の削平と瓦礫による埋め立てが認められ、遺構は検出されなかった。これは、以前に建っていた刑務所によるものかと思われる。従って、遺構は東側約2/3の範囲で検出されている。

明確な遺構は中央及び東側に集中し、西端は希薄になる。また、南側に比較して北側が密になる傾向がみられる。特に、中央部は顕著でFE11・12-92・93グリッドに土坑、柱穴などが密集し、FE11-90～11-93グリッド以南に遺構は無い。

遺物は、整地による埋め土から多量に出土している。瓦、陶磁器、ガラスなどが調査区全域に分布し表土除去の際に近世の瓦や陶磁器と現代のガラス瓶なども含まれていた。また、T2からは多量のトタンや瓦と共に礎石が出土している。

遺構で比較的まとまって遺物が出土したのはSX3、SK64である。SX3からは瓦と陶磁器片が、SK64は陶磁器片が多く出土している。また、金属製品はSX3・64・67・82・89から古銭やキセルの吸い口が出土している。特に、SK67からは3枚、SK89からは2枚の付着した古銭が出土した。この遺物の出土状況から、調査区の東西端からの出土は少なく、中央北側に多く遺物が分布している傾向がみられる。

以上から、遺構と遺物の分布には、若干の違いが認められた。



第4図 基本層序



第5図 遺構配置図

IV 遺構と遺物

今回の調査では、土坑、溝跡、ピットなどの遺構が確認され、陶磁器、瓦、古銭、石製品などの遺物が出土した。以下に主な遺構と遺物の概略を述べる。

SK1・14・SD2（第6図）

調査区の中央に西側 FE11・12-88・89 グリッドで検出された。SK1 と SK14 が SD2 を切る。

SK1 の平面形は長辺 1.0m、短辺 0.5m の隅丸方形を呈する。確認面からの深さは 30cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトで炭化物や小礫を含む。

SK14 の平面形は長辺 1.0m、短辺 0.6m の隅丸方形を呈し、確認面からの深さは 20cm を測る。覆土は 1 層で暗褐色シルトで炭化物や小礫を含む。

SD2 は南北方向の溝で、幅 40 ~ 50cm、検出された長さは 6.0m だが、南側が調査区外に延びる。確認面からの深さは 6 ~ 8 cm と浅い。覆土は 1 層でぶい黄褐色粗砂で小礫を多量に含む。遺物は覆土から、肥前の磁器で染付の碗（11）が出土した。高台内に「大明年製」の文字が書かれ、時期は 18 世紀頃と考えられる。

重複関係から SD2 より SK1 と SK14 は新しく、SK1 と 14 は覆土が類似することから、同時に埋められた可能性が考えられる。

SK18（第6図）

調査区の南東端 FE08-97 グリッドで検出された。平面形は長辺 0.9m、短辺 0.7m の楕円形を呈する。確認面からの深さ 30cm を測る。覆土は 2 層で上層に黒褐色シルト、下層は黒褐色シルトと褐色砂の混合土である。

SK47（第6図）

調査区の南東端 FE07-97 グリッドで検出された。平面形は長辺 0.9m、短辺 0.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 30cm を測る。覆土は 1 層で褐色シルトや粗砂、炭化粒が混入する黒褐色シルトである。

SK49（第6図）

調査区の南東端 FE08-97 グリッドで SK18 に隣接して検出された。平面形は径 0.7 ~ 0.8m を測る円形を呈する。確認面からの深さは 30cm を測る。覆土は 1 層で、粗砂や炭化物を含む黒褐色シルトである。

SK58・59・SP75（第7図）

調査区のほぼ中央、FE11・12-93 グリッドで検出された。SP75 が SK58 と 59 を切る。

SP75 は平面形が径 0.3 ~ 0.4m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さ 30cm を測り、東側に斜めに掘りこまれている。覆土は 1 層で、黒褐色の粘質シルトであるが、底面に粗砂を混入する。

SK58 は平面形が径 1.2 ~ 1.3m の円形を呈し、北側が SP75 に切られ、SK59 と接する。確認面からの深さは 30cm を測る。覆土は 2 層で黒褐色シルトと褐色砂質シルトの混じり土であるが、上層に炭化粒を含む。

SK59 は平面形が長辺 1.5m、短辺 1.2m の長方形を呈し、南側が SP75 に切られ、SK58 と接する。確認面からの深さは 60cm を測る。掘り方の断面形は開口部より底面が広くなるフラスコ状となる。覆土は 1 層で黒褐色シルトに褐色砂質シルトや褐色粗砂を含み、炭化粒や小礫を含む。遺物は覆土から、底部の切り離しが回転糸切の土師質土器の底部破片（1）が 1 点出土している。重複関係から、SP75 は SK58 と 59 より新しい。

SK62・63（第7図）

調査区中央の北側 FE12・13-94・95 グリッドで検出された。

SK62 は平面形は径 0.9 ~ 1.0m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは 25cm で掘り方の断面形は逆三角形状となる。南側に被熱し、炭が付着した石が据えられ、底面も被熱のため赤紫色化していた。覆土にも炭化物、焼土粒が含まれ、2 層目は炭化物層になる。遺物は骨片が出土した。この骨は、理化学分析の結果、ヒトの焼骨である可能性が高く、SK62 は墓坑とも考えられる。

SK63 は平面形は径 0.9 ~ 1.0m の円形を呈する。確認面からの深さは 15cm 程である。覆土は 3 層で、南側に炭化粒を含む黒褐色粘質シルトを堆積し、北側に暗褐色シルトと褐色砂質シルトの混合土が堆積する。

SK64（第7図）

調査区中央の北側 FE12-95 グリッド、SK58・59 の東側で検出された。平面形は一辺が 1.1m の正方形を呈

する。確認面からの深さは20cmを測り、掘り方の断面形も底面が水平で壁面がほぼ垂直に立ち上がる方形となる。覆土は4層に分かれ、1・3層に黒褐色シルト、2層に灰黄褐色シルト、4層には2層の土を含む炭化物層が堆積する。2層に陶磁器等の遺物を包含する。

遺物は、かわらけ(2)と磁器(3~5)が出土した。かわらけは、ロクロ整形の小さい皿、磁器は皿(3)と壺(4)、碗(5)である。3は肥前系、4は在地、5は瀬戸焼で、3は内面に胎土目、5は焼き跡痕と高台内に朱書きの文字が認められる。3・4は19世紀頃、5は明治以降と思われる。

出土した遺物、平・断面形の形状からSK64は近代の土坑と考えられる。

SK65・82(第7図)

調査区中央FE11-93グリッドで検出された。

SK65は平面形は径0.6~0.7mの、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは30~40cmを測り、東側が深くなる。覆土は2層で、1層の粗砂や小礫、炭化粒などを含む黒褐色粘質シルトに2層の黒褐色粘質シルトと褐色シルトの混合土がブロック状に堆積している。

SK82は平面形が長辺1.0m、短辺0.6mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは30~60cmを測り、北側が浅く、南側が深くなる。覆土は2層で、SK65と同じ土が堆積している。

遺物は覆土から、永楽通宝(8)が出土した。

SK65・82は覆土の様子から、同時期に埋没したと考えられる。

SK67(第7図)

調査区中央FE12-93グリッドでSK59の北側に検出された。平面形は長辺1.0m、短辺0.5~0.6mの不整形を呈する。確認面からの深さは20~30cmを測り、北側が深い。覆土は2層で、1層は暗褐色シルトに粗砂と炭化粒、小礫を含み、2層は暗褐色シルトと粗砂の混合土となる。遺物は覆土から、付着した銅銭3枚が出土した。銭名が判別できたのは内2枚で、いづれも永楽通宝である。

SK89(第7図)

調査区中央や西側FE12-91グリッドで検出された。平面形は径0.6~0.7mを測るほぼ円形を呈する。確認面からの深さは20cmを測る。覆土は1層で、炭片や

多量の礫を含む黒褐色シルトである。遺物は、覆土から瓦の破片や図示した2枚付着の古銭(9)が出土した。古銭の銘名は磨滅が激しいが、篆書体の元豊通宝と思われる。

SX98(第7図)

調査区東側FE10-95グリッドで検出された。東半を礫群で擾乱されている。平面形は1辺が約0.7mの隅丸方形を呈するとと思われる。確認面からの深さは25cmを測る。覆土は2層で、1層は暗褐色シルトに炭片と多くの礫を含み、2層は炭化粒と少量の小礫を含む。遺物は覆土から、内面にへら削り調整が施されるミニチュアの土製品(10)が出土した。

SD9(第8図)

調査区西側のFE13~15-89・90グリッドで検出された南北方向の溝跡で、SX3の西側を切る。

幅55~80cm、検出された長さは5.5mだが、北側が擾乱により削平されている。確認面からの深さは20~58cmを測り、北側で深くなる。覆土は3層で、1層は褐灰色シルトと暗褐色シルトの混合土、2層は褐灰色シルト、3層は礫を多量に含む黒褐色シルトである。

遺物は、覆土から多くの瓦と共に磁器などが出土したが、ガラス片も含まれていた。図示したのは磁器(12~14)と瓦(15~18)である。12は18世紀頃の肥前焼で、二次焼成を受けている。14是在地の染付で、明治以降のものと思われる。15・16は黒丸瓦で、17は黒平瓦、18は赤丸瓦で穿孔が認められた。ガラス片も出土していることから、SD9の遺物は後世の流れ込みと考えられる。

SD61(第8図)

調査区中央のやや北側FE12・13-92~94グリッドで検出された東西方向の溝跡である。全長15.0m、幅0.3~1.0m、確認面からの深さ約20cmを測る。覆土は2層に分かれが、概ね黒褐色シルトと褐色砂質シルトの混じり土であるが、1層目に多量の小礫を含む。

SX3(第9図)

調査区中央や北西側FE13~15-89~91グリッドで検出された。西側をSD9と擾乱に切られ、北側も擾乱により削平される。平面形は直径2.9mを超える円形になると考えられる。確認面からの深さは約50cmを測る。覆土は10層に細分され、3・6・9層に炭化物

を多量に含み、4・5層には炭化粒と共に焼土も多く含む。また、北側の最下層となる8層は河原石の礫層となる。遺物は、陶磁器、土製品、金属製品、瓦など多量に出土した。

19～22は肥前磁器で概ね18～19世紀と思われる。19は火種を入れる火入れで、焼き継痕と高台内に朱書きの文字がみられ、20は窯床と器物の接着を防ぐ為の砂が高台部置付に付着している。23は瀬戸・美濃の磁器碗、24は相馬焼の土瓶で幕末から明治の所産と考えられる。25～29は在地産の陶器と磁器で、25・26は内面に胎土目が残る。27・28は植木鉢で、28は脚が3本付き、明治時代以降の磁器である。30はコンロと考えられる瓦器で、31は表面に魚が型押しされている土製品である。32は三角錐の形状で、先端に軸が付着し、焼台などの脚の可能性がある。33は煙管の吸い口で中に羅字（竹）が残存している。34は寛永通宝である。35・36は黒瓦、37は赤瓦で、35の軒丸瓦には右三つ巴紋が描かれる。

SX23（第9図）

調査区東側FE09-96グリッドで検出された。西側を搅乱により削平されている。平面形は、長さ1.0m以上、幅0.5mの隅丸長方形と思われる。確認面からの深さは30cmを測る。覆土は3層で2層目が炭片が多く含む炭化物層である。また、東側壁面には被熱した痕跡が認められた。出土した炭化材は理化学分析の結果、広葉樹のブナ属で年代は1447～1478calADであった。

遺構外出土遺物（第14～第26図）

今回の調査では、調査区全体が削平され埋められていたことから、遺構出土の遺物は限られていた。しかし、その埋め土からはガラス片などと共に陶磁器や瓦など、多くの遺物が出土した。その中で、主なものを図示したので、その遺物について概略を述べる。

38～43は中国産の磁器である。38・39は龍泉窯の青磁碗の破片で39には外面に蓮弁紋が認められる。時期は38が15世紀、39は16世紀頃と思われる。40～43は景德鎮の染付皿である。40・41は二次焼成を受け青く変色しており、42・43は高台に砂が付着する。時期は40・41が16世紀、42・43は16～17世紀頃と考えられる。44～47は中世陶器と思われる。44は珠洲焼で内面にアテ痕、外面にタタキ目がみられる。

48・49は瀬戸・美濃の天目茶碗で外面に鉄軸がかけられるが、外面下部1/3は無軸である。時期は17世紀初頭と思われる。天目茶碗は、図示しなかったが他に高台のみの破片が1点出土している。

50～53は瀬戸・美濃の陶器である。50～52は16世紀後半の皿で、内面に刻文が施される折縁皿（50）や見込みに印花の菊文が施されるもの（51）がある。53は江戸時代頃の茶入れと思われ、外面に鉄軸がかけられる。

54～62は唐津産の陶器で、時期は概ね16～18世紀頃と考えられる。54・55は碗で、他は皿である。54・56・58～60は高台が削り出しによって作出され、56・57・59には胎土目が認められる。また、57は軸の掻き出し痕と思われるヘラ削りの痕跡が認められる。61は底部の資料であるが、大皿の可能性が考えられ、62の底部には墨書がある。

63は大堀相馬の陶器碗で時期は明治以降と思われる。64～72は在地産と考えられる陶器である。

64～67は内面に鉗目がある擂鉢であるが、66は底部に穴が開けられており、植木鉢に転用したと考えられる。時期は64～66が江戸時代で18～19世紀初頭、67は明治時代以降と思われる。

68～71は灯火具の秉燭である。69は上部のみ、70は台部のみとなる。68・69・71はいづれも内外面の上部に鉄軸がかけられ、68・70・71は底部切り離しが回転糸切で、68と70は底部に穴が認められる。

72は、にぶい黄橙色の用途不明の陶器体部である。ロクロ整形で、内面上部が内側に直角に内湾する様子が窺えることから、上部が閉じる形になるとも考えられる。

73～76は瀬戸・美濃の染付の磁器碗である。74は見込みに透かしの龍が描かれ、76は底部の高台内に朱書きの文字が書かれ、焼き継痕がある。時期は、73・74は19世紀頃、75・76は幕末～明治と思われる。

77～87は肥前産の磁器である。器種は碗（77～80・82・84）、小杯（81）、皿（83・85）、鉢（86）、戸車（87）である。77は17～18世紀頃の青磁で、内外面に青磁軸がかけられるが二次焼成を受けているため、白っぽく変色している。78は高台内に文字が書かれ、79は雪輪草花文が、80は色絵が外面に描かれる。また、79と84は高台に砂が付着し、86は焼き継ぎ痕がある。

87は中央部に擦り痕が見られる。時期は概ね17～19世紀頃に比定される。

88～92は波佐見焼の磁器で、碗(88～90)、皿(91)、鉢(92)がある。89は外面に雪輪草花紋、90は見込みに二重團線菊花文、外面に二重網目文、92は見込みにコンニャク印判五弁花文、内面に扇形他、外面に唐草文が描かれる。また、91は蛇ノ目凹型の高台となる。時期は概ね18世紀と考えられる。

93も18世紀頃の大堀相馬焼で、内外面に灰釉がかけられる。

94・95は在地産の磁器碗で、94の内面に胎土目、95は見込みに鉄釉の絵のようなものが見られる。

96～101はかわらけ、102は土師質土器、103～105は土製品である。96～100は皿で、ロクロ整形で切り離しは回転糸切となる。96の底部には墨書きがある。

101は用途不明であるが、2ヵ所の孔がある。102は底部に3ヵ所の刻みが認められ、内面底にも割れ痕があることから、底部に脚、内面に凸状のものが付くと思われる。

103・104は台形状の土製品、105は土鈴と思われる。何れも外面に指圧痕がみられる。104は形状と大きさなどから焼台とも考えられる。

106～115は瓦である。瓦は、図示した他にも大量に出土したが、主なものを選出した。

黒瓦(106～111)と赤瓦(112～115)の2種が出土し、種類は、軒丸瓦(106・107・113・114)、軒平瓦(111)、丸瓦(108～110)、鬼瓦(112)、棟瓦(115)がある。106と113は、元禄13(1700)年～延享2(1745)年まで山形城の城主であった堀田氏の家紋である木瓜紋、107と114には火災除けとしても描かれる11個の連珠が廻る右三つ巴紋がある。そして、108・111には穿孔、109の外面には「八つ菊」の刻印がある。この刻印がある平瓦は、平成7年度に山形市教育委員会が行った本丸堀発掘調査でも出土している。

116～124は石製品である。砥石(116～118)、石臼(119)、硯(120～122)、礎石(124)と径21mm、厚さ7mmで中央に孔が開けられた用途不明の小さなドーナツ状の石製品(123)がある。

砥石は、116と117が表裏面と両側面の4面、118は表面と両側面を砥面として使用している。117は砥

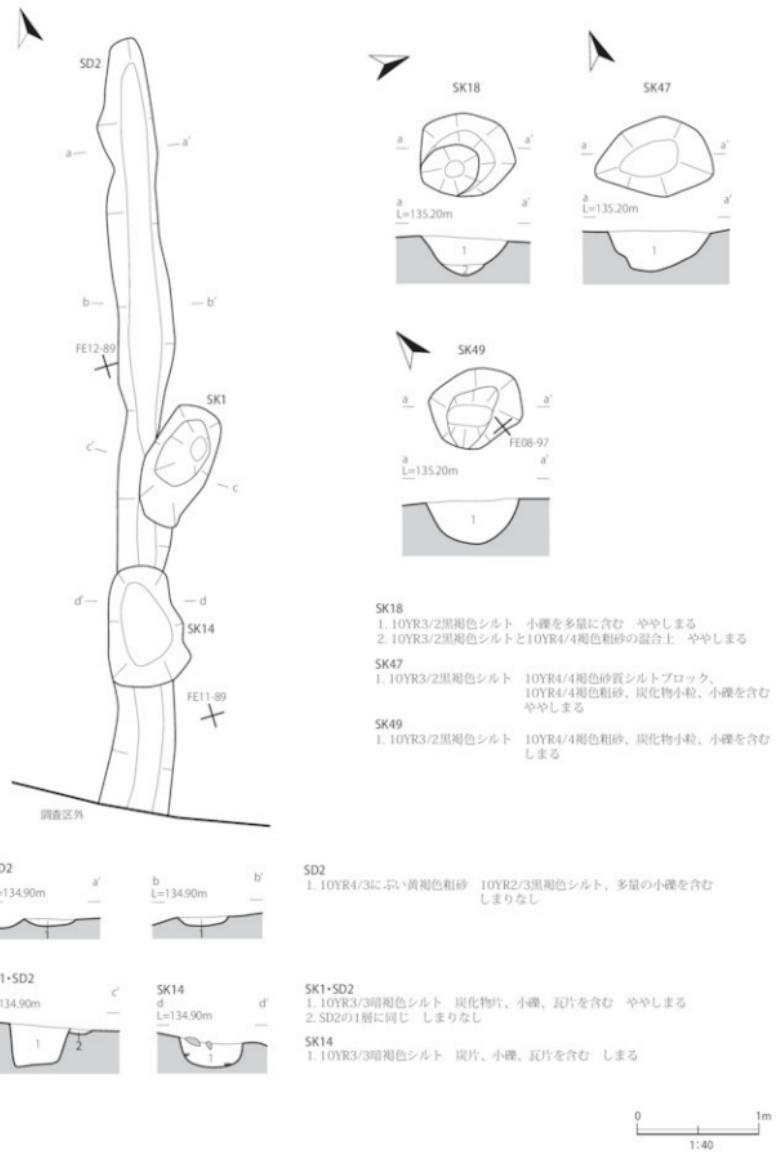
痕が明確に残り、使い込まれている様子が窺える。

石臼(119)は、上臼の部分で横に挽木を入れる凹がある。一部が赤褐色に変色し、二次焼成を受けていると思われる。硯は3点とも破損品で墨を摺る陸の部分である。礎石(124)は、T4からトタンやガラスなどと共に斜位で出土した。下部を大きく欠き、中央部分に柱を置く約14.0cm四方の凹が作出され、工具による削り痕がみられる。被熱の際か金属片の一部が付着している。

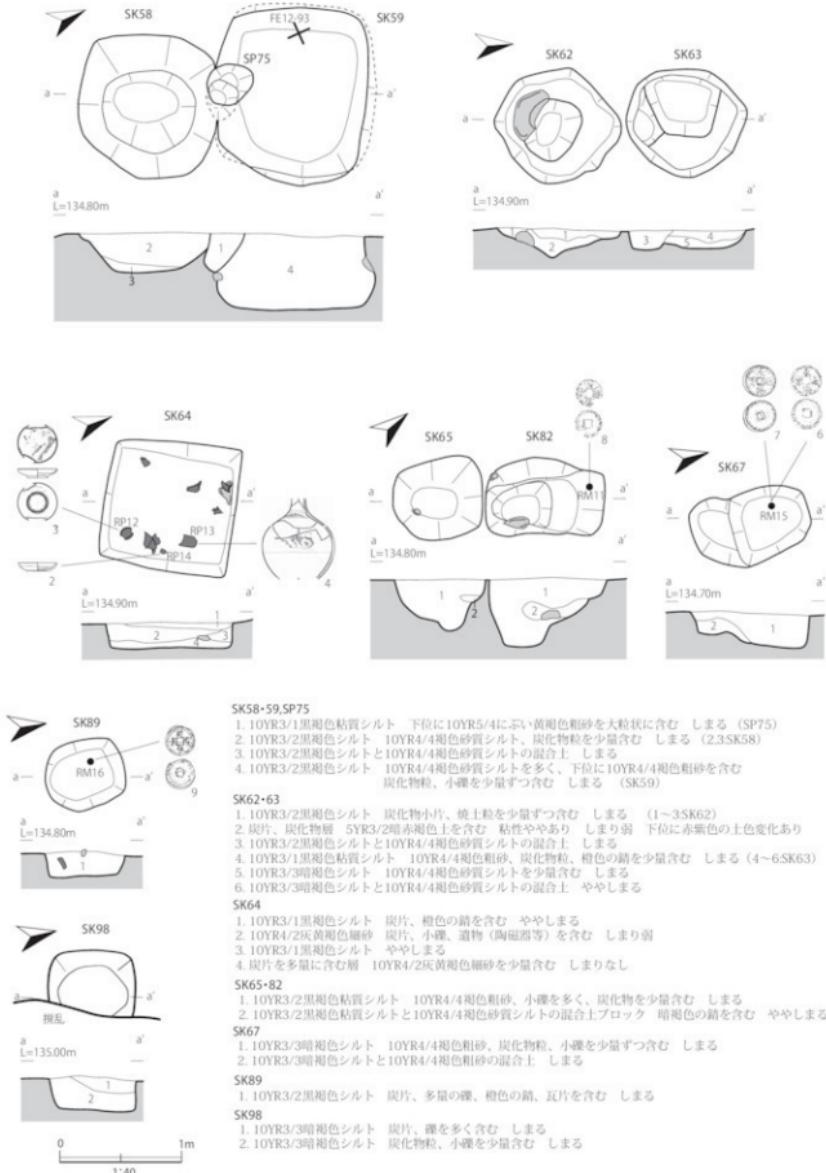
125は刀子の柄と考えられる金属製品である。片面には装飾痕とみられる円形の跡が4個ある。126は細い棒状の製品で、簪の一部とも考えられる。127～139は古銭である。銘名が判別できるのは、祥符通宝(127)、皇宋通宝(128)、熙寧元宝(129)、元豐通宝(130)、永樂通宝(131～133)、寛永通宝(134・135)などで、他は磨滅が激しく判別できない。

140～150は重ね焼きの際に製品と製品の間に挟む窯道具の焼台である。円形で扁平な器形で表あるいは裏に糊般痕や器の痕跡があるもの(140～142)、図示したものと小破片を含め60点出土。脚部貼り付けて底に漢数字を摘み出して作出しているもの(143～145)、図示したものを含め14点出土。ロクロ整形で、脚部を工具などで作出し、底に算数字を線刻しているもの(148～150)、図示したものを含め31点出土。この他にも、図示しなかったが、小型の焼台と思われるもの1点、团子状の粘土の塊1点など、窯道具かと思われるものが出土している。また、前述した10・32・72・103・104もその形体から、焼台の可能性がある。

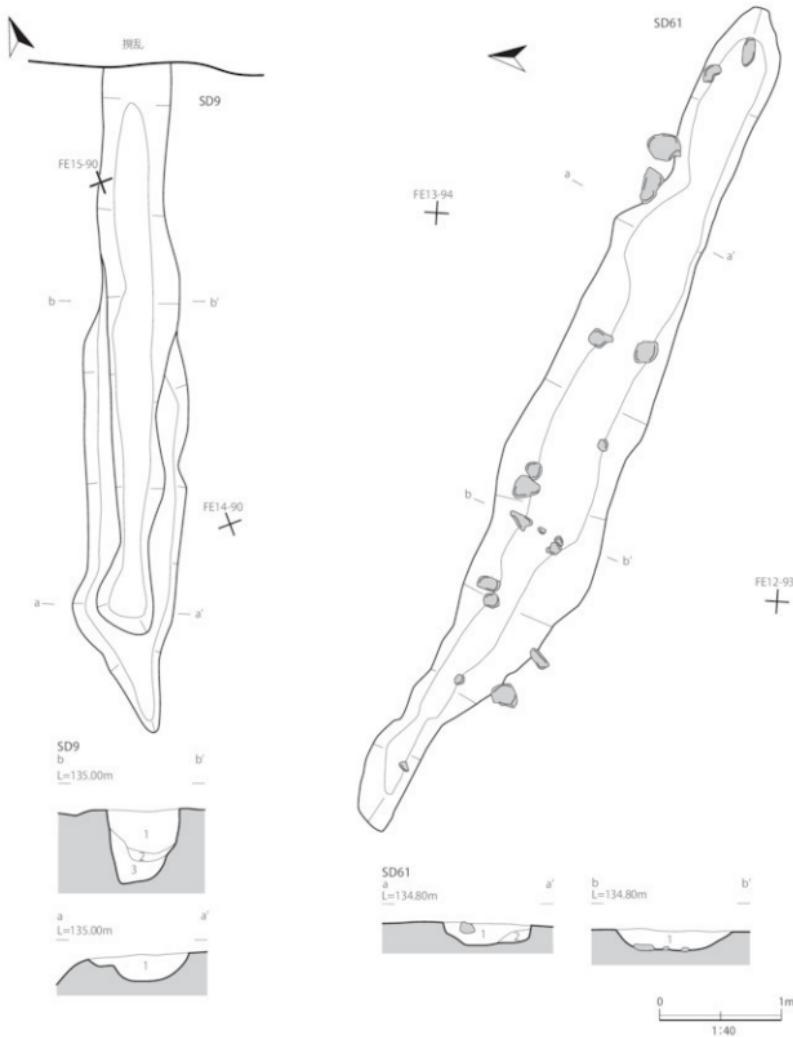
151～154は器の外面に名前や「山形刑務所・・・」、「札幌矯正・・・」、「山刑・・・」などの文字が書かれていることから、山形刑務所関係の遺物と推測される。155は子供用の茶碗で、書かれた野球少年の帽子に「★」がみられることから戦前の製品と考えられる。156～160は近代のガラス製品である。156は日東コロンブスの靴クリーム瓶、157はサンエス万年筆、158は縦崎ライトイギ(現:株式会社ライトイ)のインク瓶である。159は薬瓶であるが、この付近にかつて建っていた、旧済生館病院または衛生病院のものか。160の目薬容器は、昭和初期に開発された滴下式両口点眼瓶で、「HOTO」の文字があり、現在のロート製薬(株)の製品である。



第6図 SK1・14・18・47・49・SD2



第7図 SK58・59・62～65・67・82・89・98・5P75

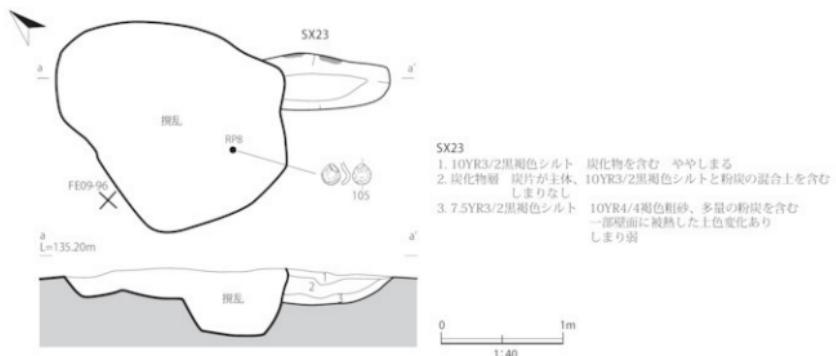
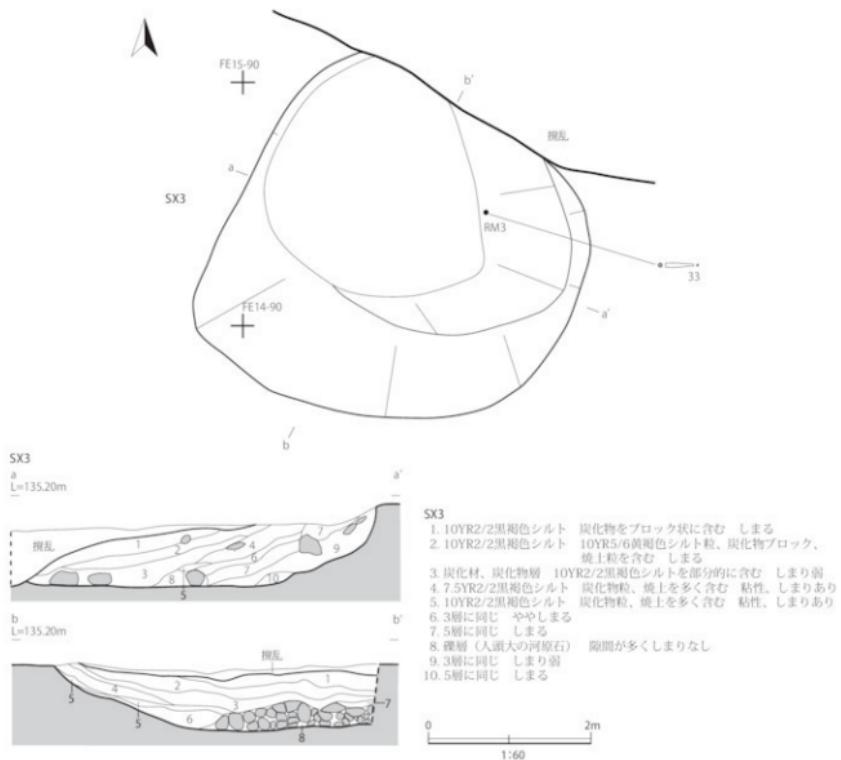
**SD9**

1. 10YR4/1褐色シルトと10YR3/2暗褐色シルトの混合土 粘性ややあり しまる
2. 10YR4/1褐色シルト 粘性ややあり ややしまる
3. 10YR3/2黒褐色シルト 硬を多量に含む しまる

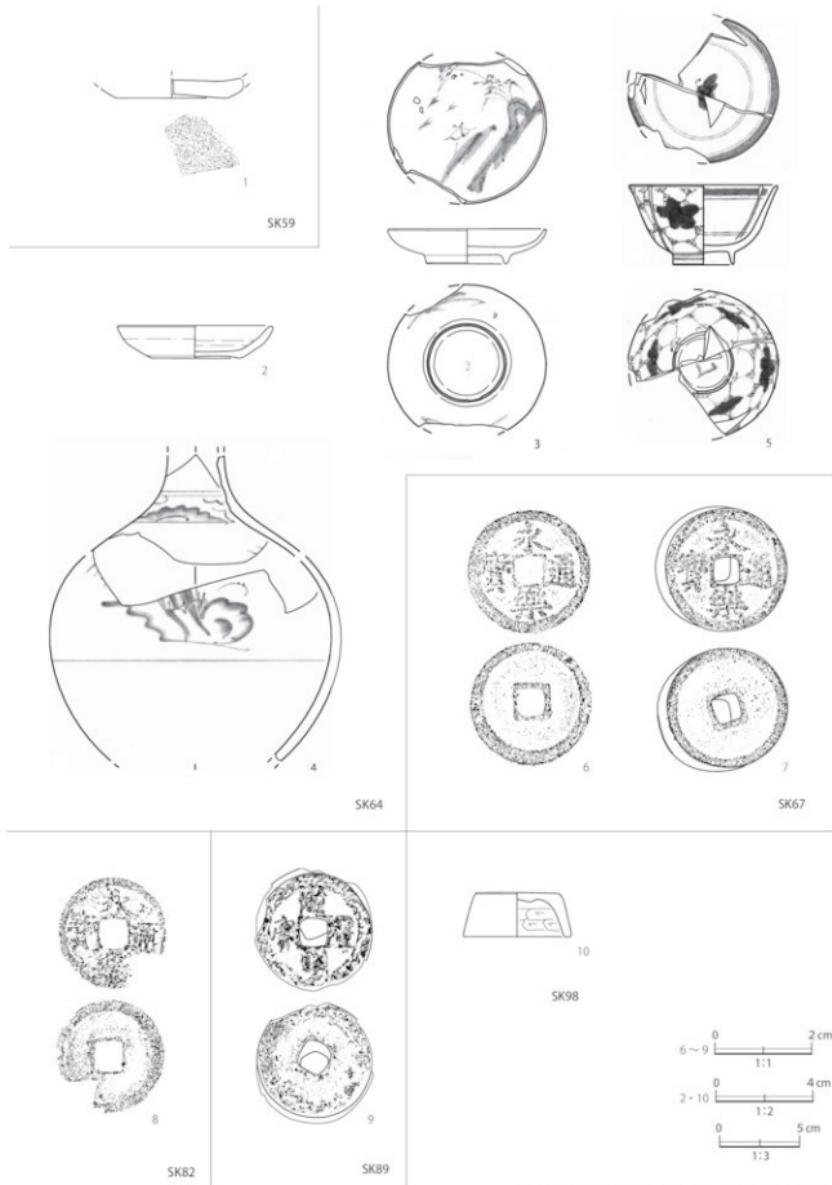
SD61

1. 7.5YR3/2黒褐色シルト 10YR4/4褐色砂質シルト、多量の小礫を含む しまる
2. 7.5YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの混合土 しまる

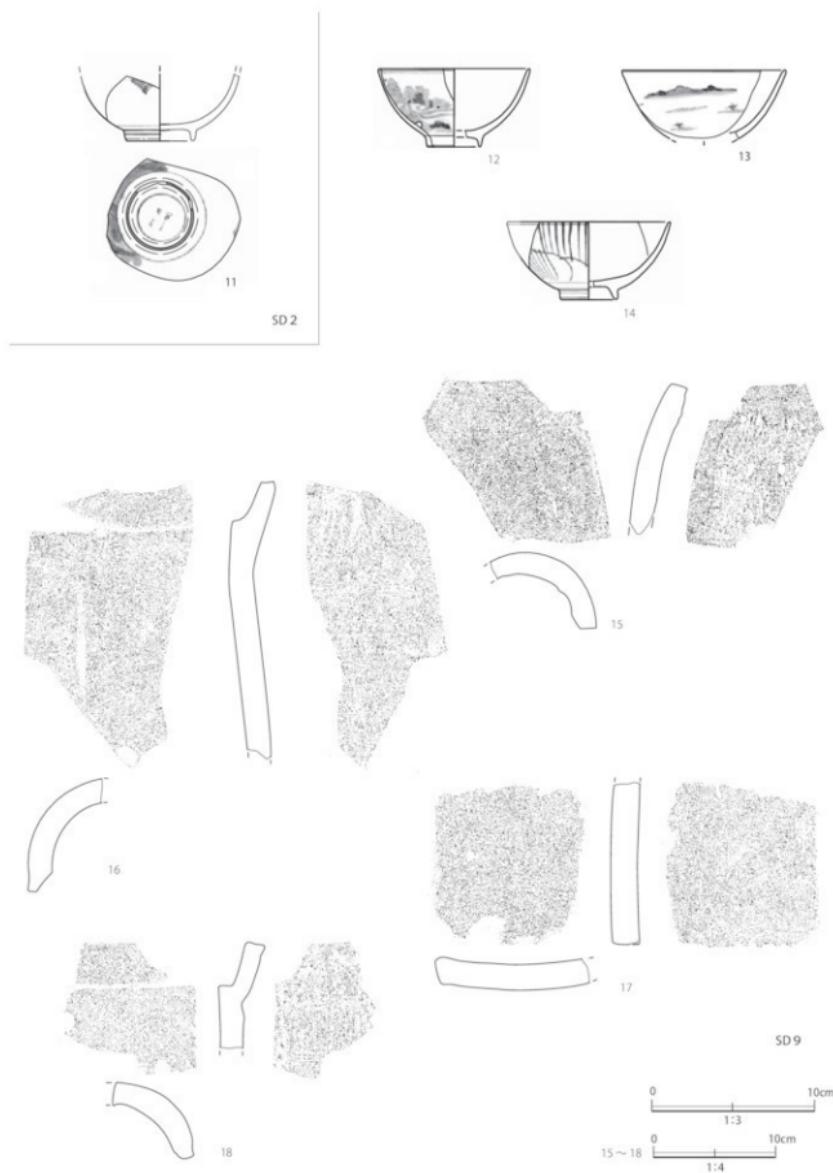
第8図 SD9・61



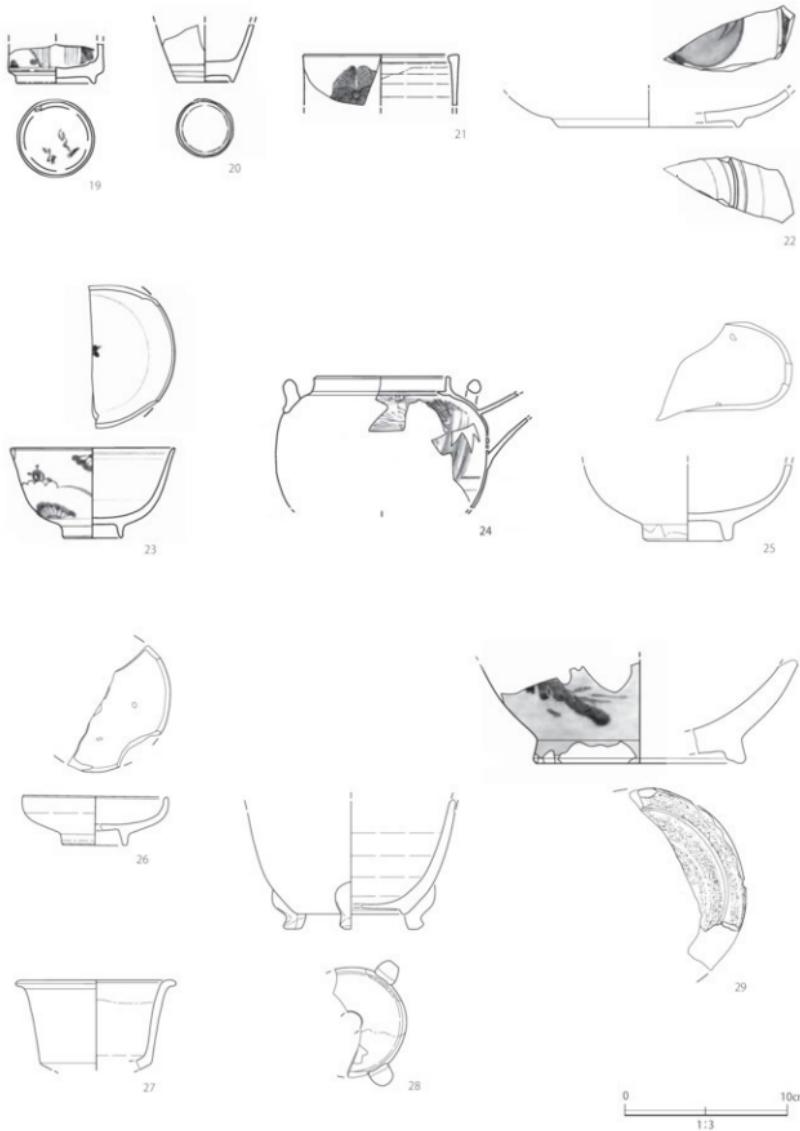
第9図 SX3・23



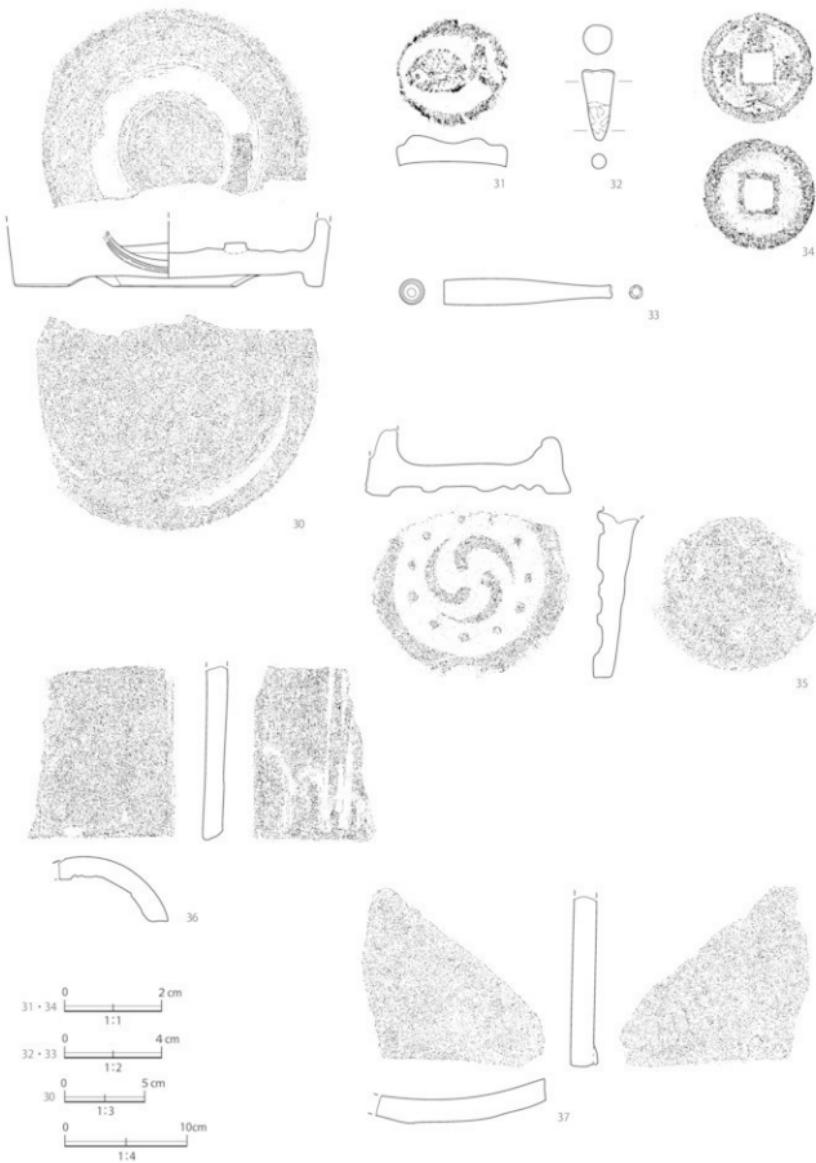
第10図 SK59・64・67・82・89・98出土遺物



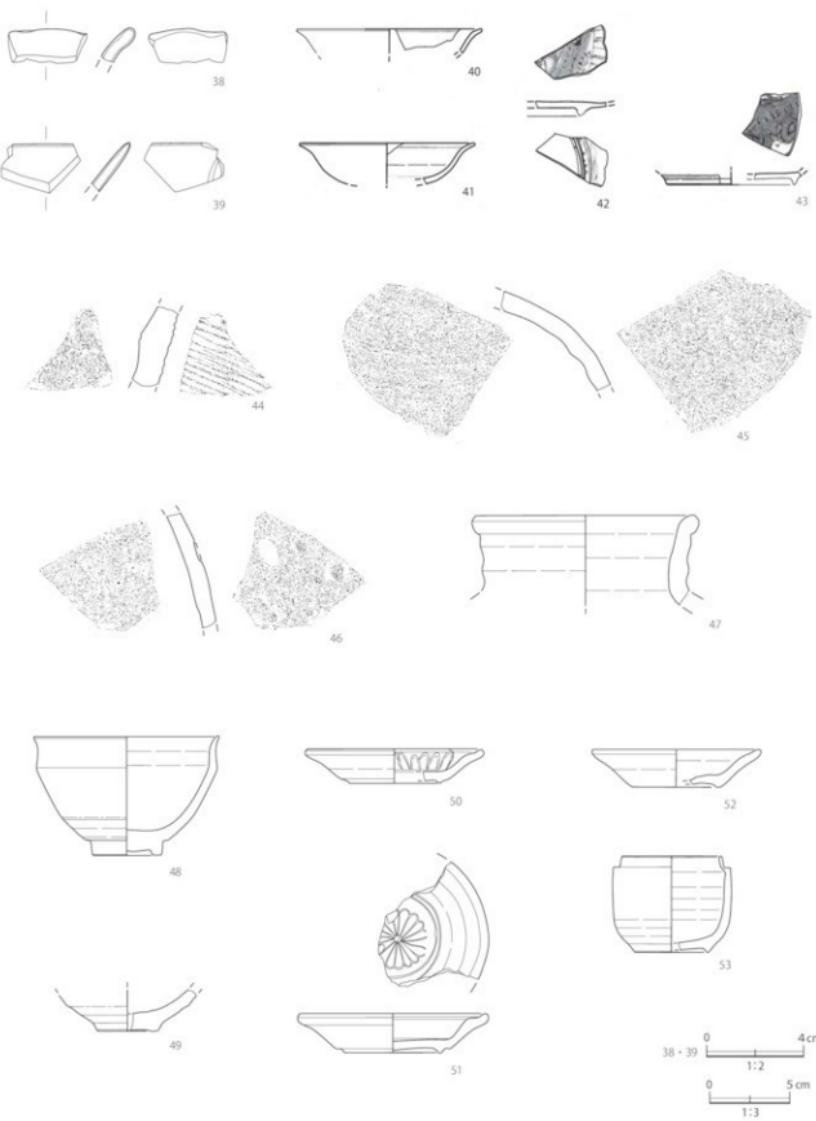
第 11 図 SD 2・9 出土遺物



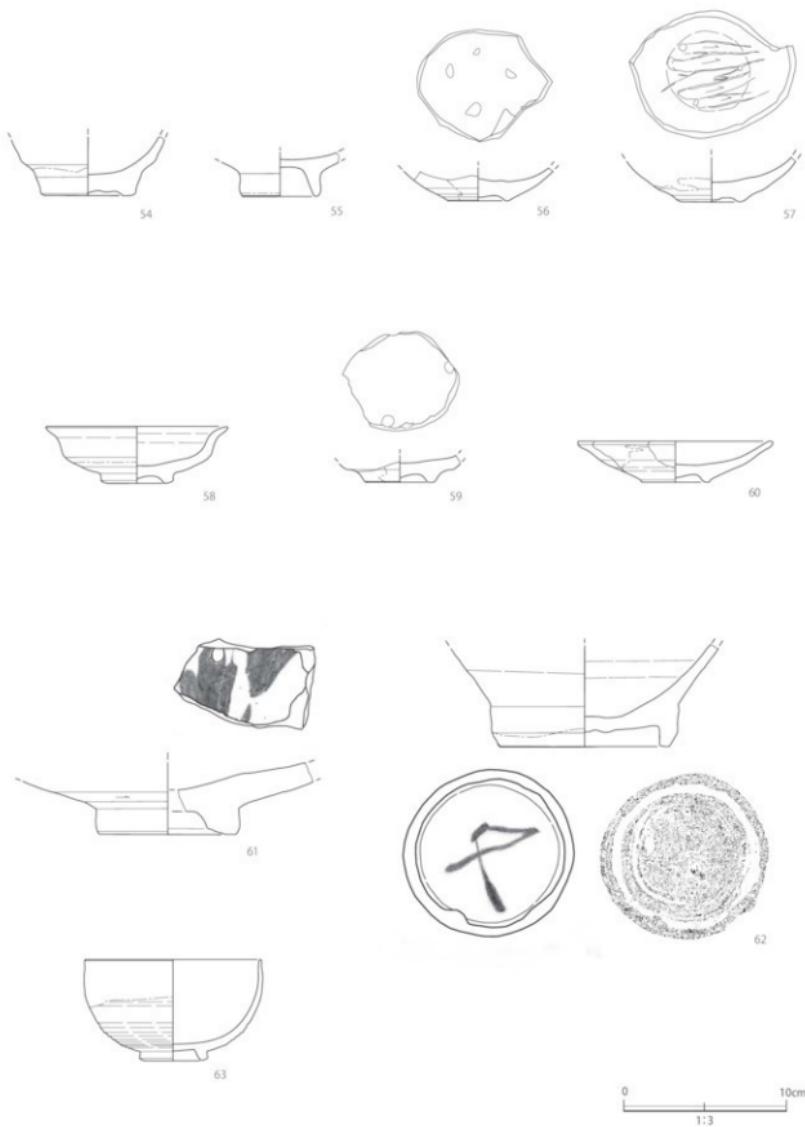
第12図 SX3出土遺物 1



第13図 SX3出土遺物 2



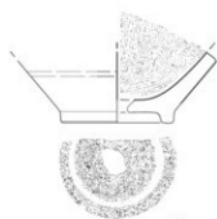
第14図 遺構外出土遺物 1 (青磁・中世陶器・瀬戸美濃系陶器)



第15図 遺構外出土遺物2(唐津・大堀相馬陶器)



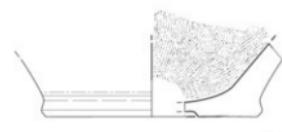
64



66



65



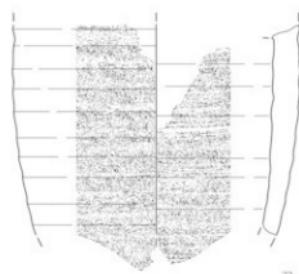
67



68



69



72



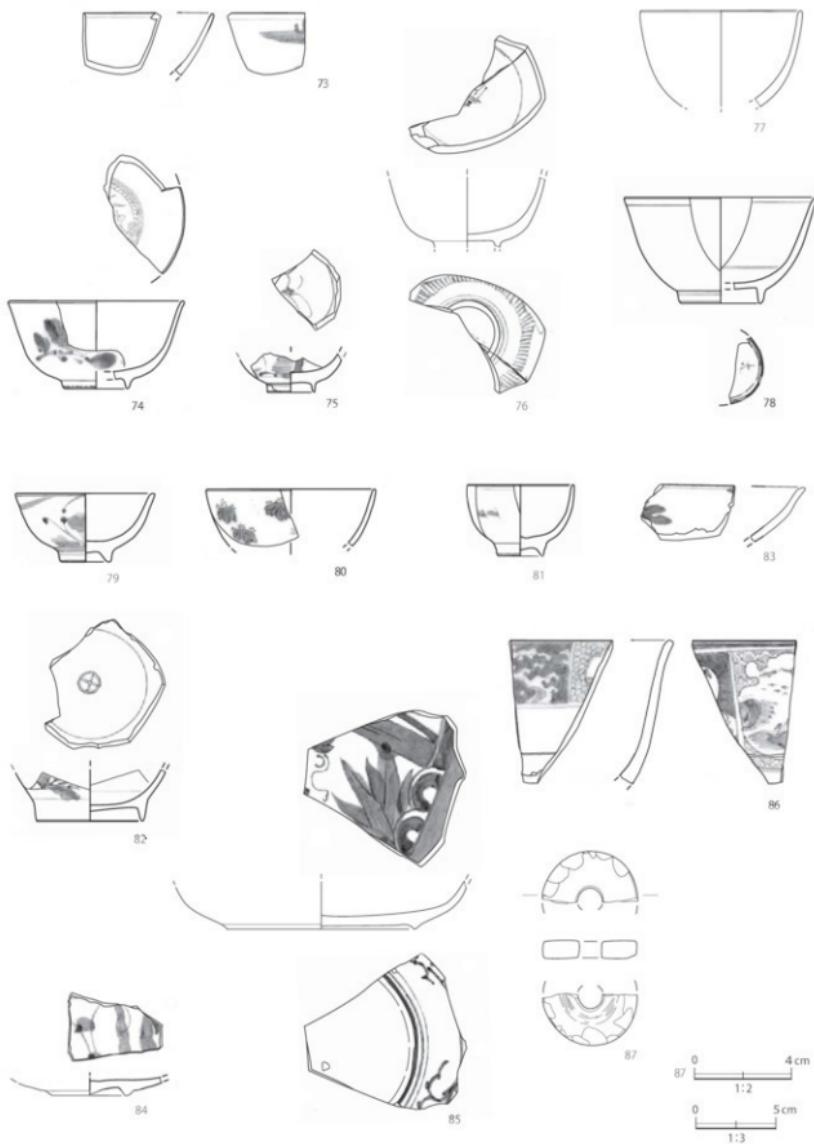
70



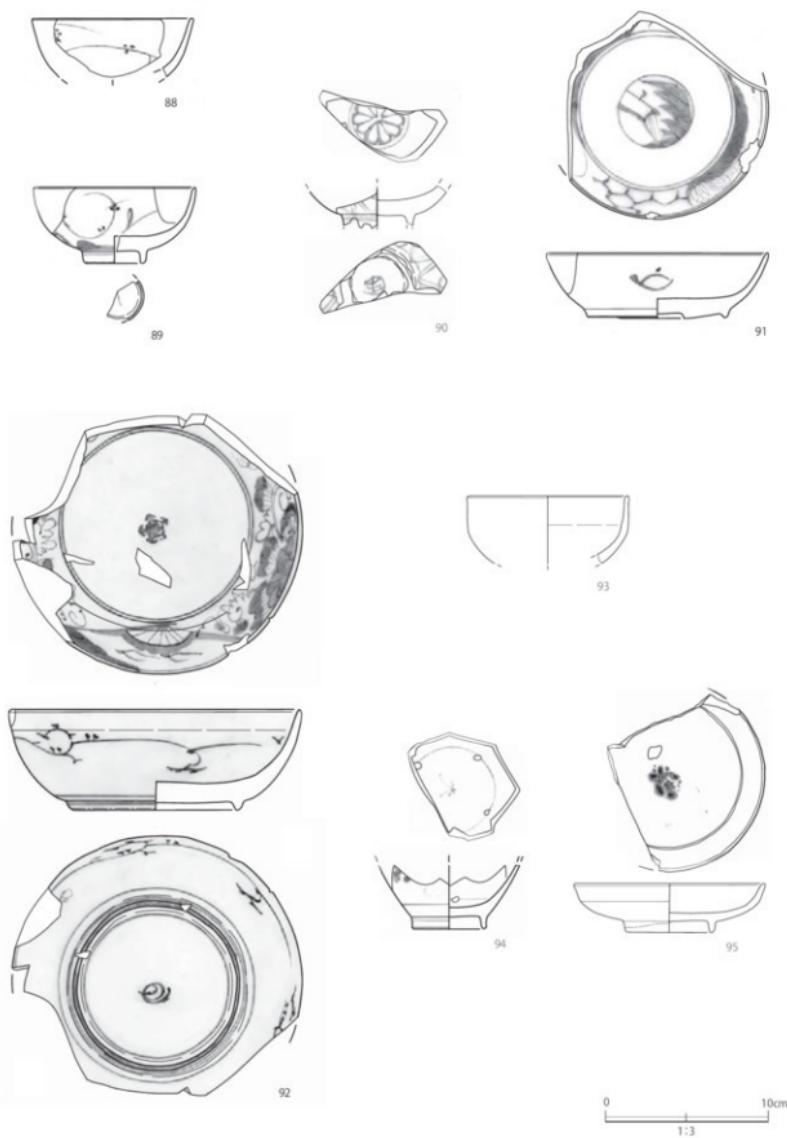
71



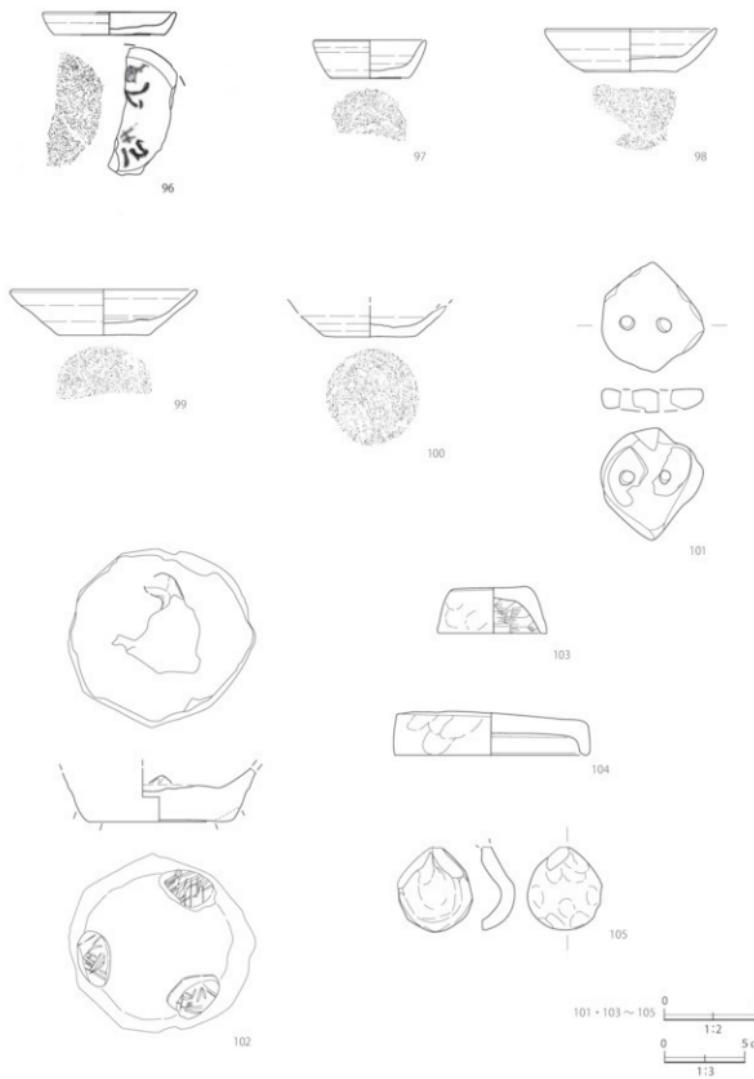
第16図 遺構外出土遺物 3 (在地陶器)



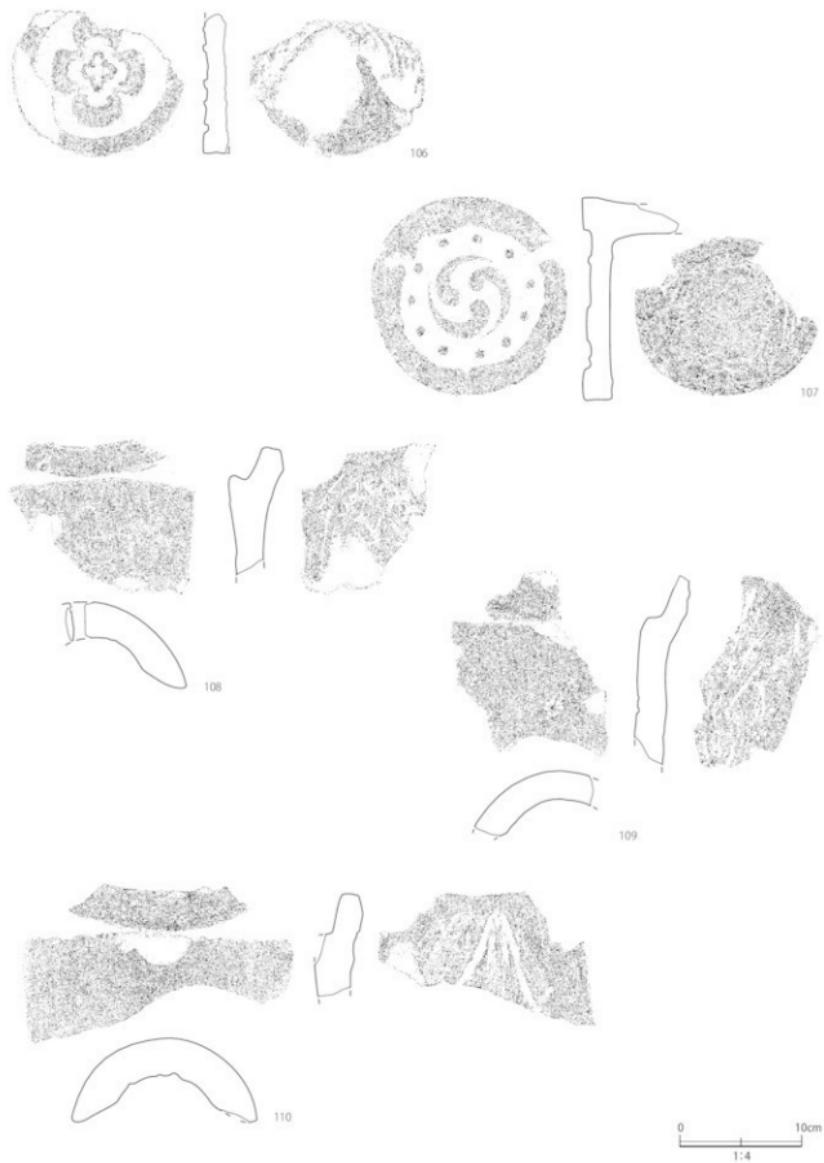
第 17 図 遺構外出土遺物 4 (瀬戸美濃・肥前磁器)



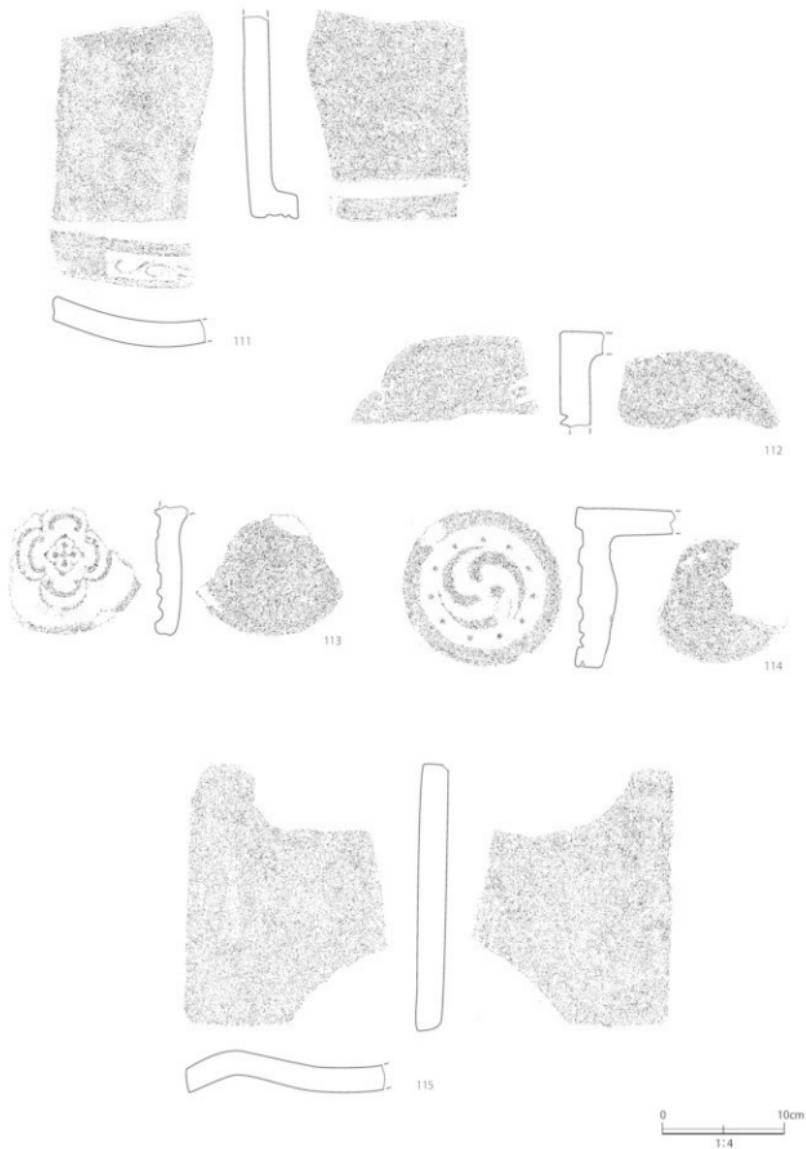
第18図 遺構外出土遺物5(波佐見・大堀相馬磁器)



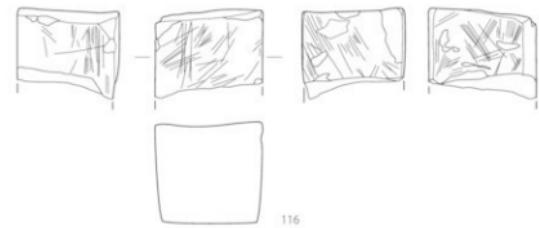
第19図 遺構外出土遺物 6 (かわらけ・土師質土器・土製品)



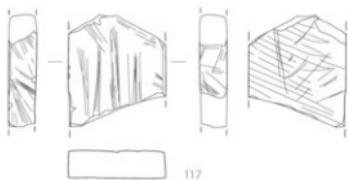
第20図 遺構外出土遺物7(瓦)



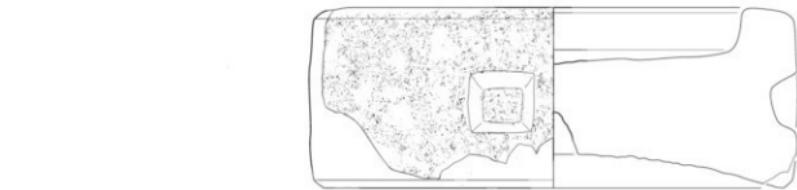
第21図 遺構外出土遺物8(瓦)



116



117



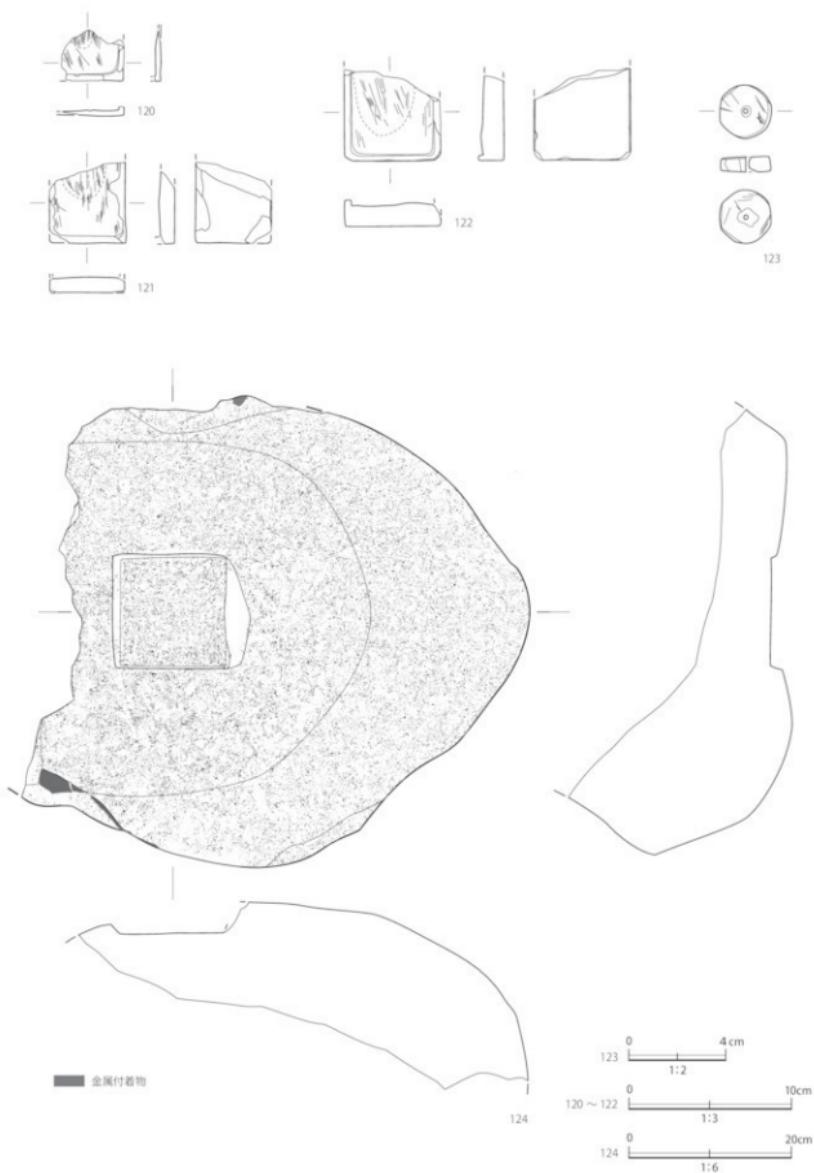
118



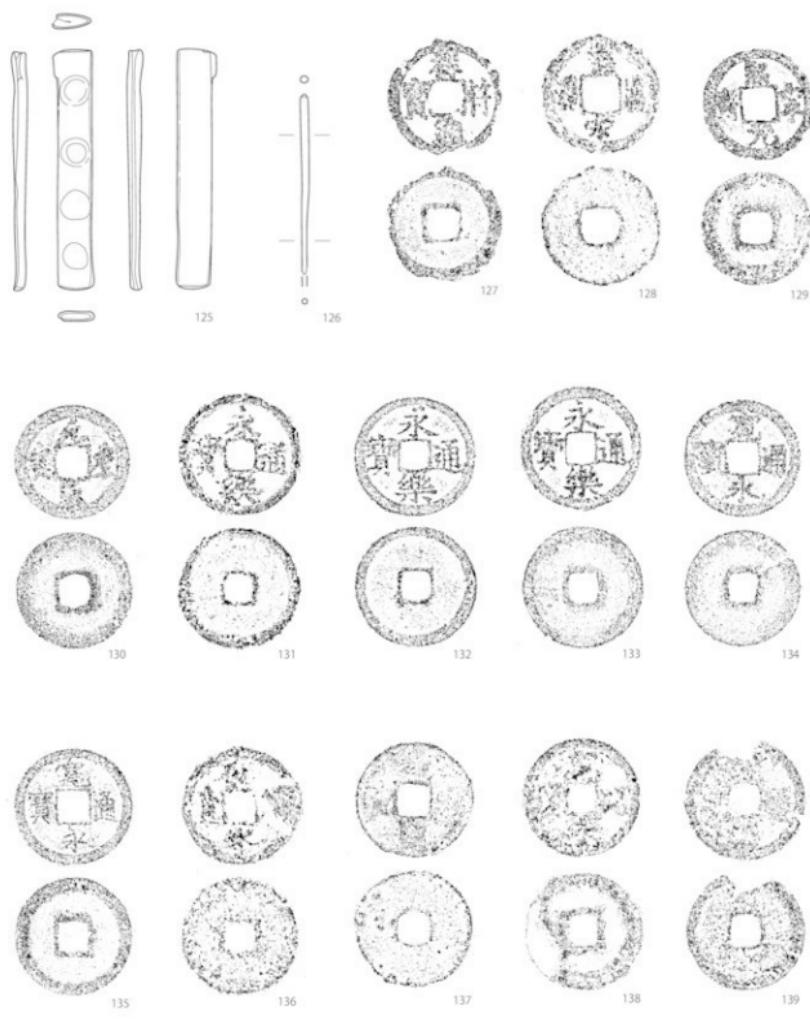
119

0 10cm
1:3

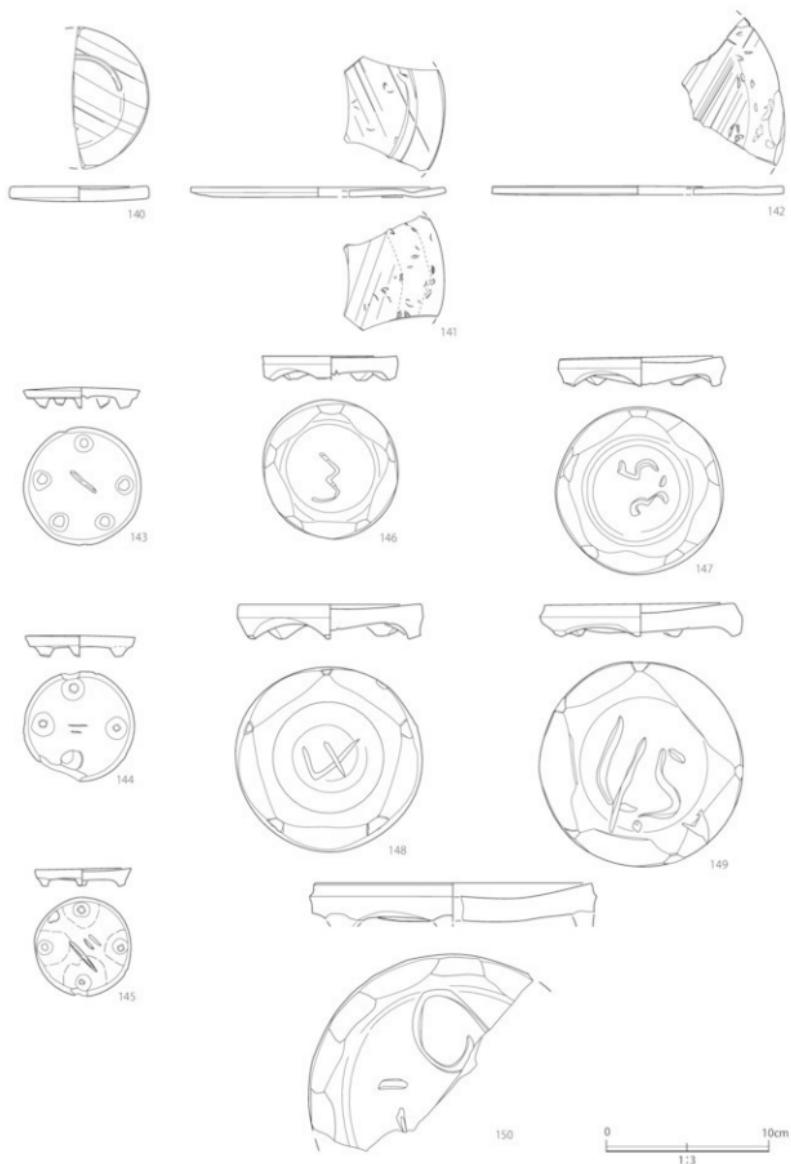
第 22 図 遺構外出土遺物 9(石製品)



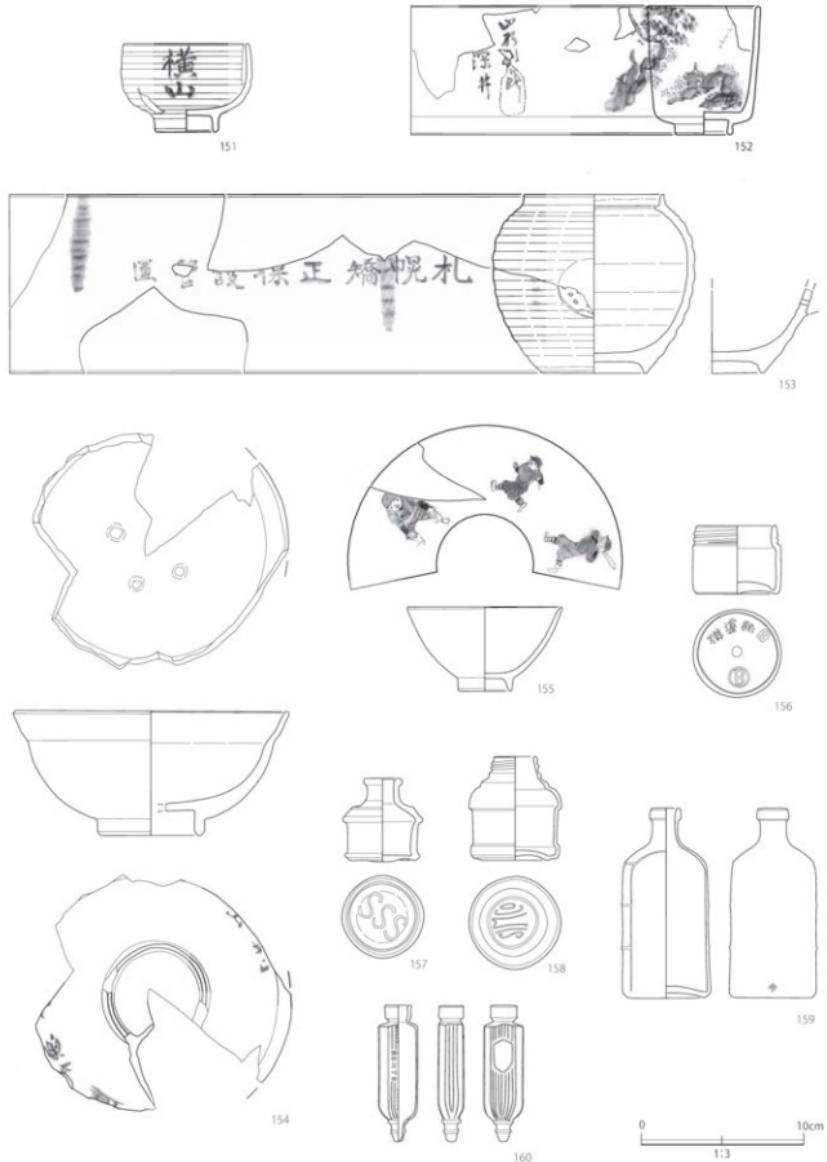
第23図 遺構外出土遺物 10(石製品・礎石)



第24図 遺構外出土遺物 11(金属製品)



第25図 造構外出土遺物 12(焼台)



第26図 遺構外出土遺物 13(近代陶磁器・ガラス製品)

表2 遺物観察表

掫因 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)				色調	出土 地点	登録 番号	備考	
				口径	底径	高さ	器厚					
1	土師質土器	盆	(70)	10	外面：10YR6/4に赤い黄褐 内面：10YR6/6稍 脱土：10YR6/6明褐色	SK59F					底部：回転系切り	
2	かわらけ	盆	(64)	(36)	13	3 外面：7.5YR6/6 棕 内面：7.5YR6/6 棕 脱土：7.5YR6/6 棕	SK64F2	RP14			ロクロ整形 底部：回転系切り	
3	磁器	盆	96	49	21	3 外面：5GY8/1灰白 内面：5GY8/1灰白 脱土：N8/1灰白	SK64F2	RP12			肥前系：19世紀 内面：透明釉 内面：胎土目	
4	磁器	壺				6 外面：7.5GY1 明顯灰 内面：5YR8/1灰白 脱土：N8/1灰白	SK64F2	RP13			在地？：19世紀・江戸 内面：輪削れあり 外面：透明釉	
10	5	磁器	瓶	91	37	49	4 外面：SBT7/1 明青灰 内面：SBT7/1 明青灰 脱土：7.5YR8/1灰白	SK64F 西区M埋				濱田：明治以降 高内：朱書き 兼き墨痕
	6	金属製品	銅鍊	径：25.4		厚：1.4 重さ：34g		SK67F1	RM15-3		無：7.5付着で出土 重さ：永楽通寶	
	7	金属製品	銅鍊	径：25.0		厚：1.7 重さ：88g (2枚) (2枚)		SK67F1	RM15-1-2		No.6 と付着で出土 表面銘名：永楽通寶	
	8	金属製品	銅鍊	径：23.2		厚：0.9 重さ：14g		SK82F	RM11		表面銘名：永楽通寶	
	9	金属製品	銅鍊	径：23.5		厚：3.0 重さ：57g (2枚) (2枚)		SK80F1	RM16		2枚着て出土 表面銘名：永楽通寶（篆書体？）	
	10	土製品	ミニチュア上径：34 下径：(44)		18	外面：10YR7/3に赤い黄褐 内面：10YR7/3に赤い黄褐 脱土：10YR7/3に赤い黄褐	SK89F				产地：時代不明 内面：ヘラ削り 紋様具？	
	11	磁器	瓶		40	4 外面：7.5YR8/1灰白 内面：10YR8/1灰白 脱土：2.5YR8/1灰白	SD2F				肥前：18世紀・江戸 高内：「大明年製」	
	12	磁器	瓶	(92)	(32)	48	3 外面：7.5YR8/1灰白 内面：10YR8/1灰白 脱土：5YR8/1灰白	SD9F				肥前：18世紀・江戸 二次焼成
	13	磁器	瓶	(100)		3 外面：10GY8/1 明顯灰 内面：5GY8/1灰白 脱土：2.5YR8/1灰白	SD9F				江戸末 内外面：透明釉	
11	14	磁器	瓶	(100)	(36)	48	4 外面：N8/1灰白 内面：N8/1灰白 脱土：7.5YR8/1灰白	SD9F FE13-89				在地？：明治以降 内外面：透明釉
	15	瓦	丸瓦			20 外面：N2/0黒 脱土：7.5Y4/1灰	SD 9F				黒瓦	
	16	瓦	丸瓦			21 外面：N2/0 黒 脱土：N6/0灰	SD 9F				黒瓦	
	17	瓦	平瓦			22 外面：5Y5/1灰 脱土：5Y5/1灰	SD 9F				黒瓦	
	18	瓦	丸瓦			20 外面：7.5YR3/1 黒褐 脱土：5YR6/4に赤い赤褐	SD 9F				赤瓦 孔あり	
	19	磁器	灰入れ		47	3 外面：10YR8/1灰白 内面：10YR8/1灰白 脱土：5YR8/1灰白	SK3F				肥前：18～19世紀 高内：朱書き文字？ 兼き墨痕	
	20	磁器	盆		35	3 外面：5GY8/1灰白 内面：5GY8/1灰白 脱土：5YR8/1灰白	SK3F				肥前：18世紀～19世紀 内面：圓線 3本 高内：湖綾：木 豊竹持目、透明白	
	21	磁器	不明	(94)		3 外面：7.5GY8/1 明顯灰 内面：7.5GY8/1 明顯灰 脱土：N8/0灰白	SK3F				肥前：19世紀・江戸時代 内外：湖綾 3本	
	22	磁器	盆		(110)	5 外面：N8/0灰白 内面：10YR8/1灰白 脱土：2.5YR8/1灰白	SK3F				肥前	
12	23	磁器	瓶	(101)	(35)	55	4 外面：10YR8/1灰白 内面：10YR8/1灰白 脱土：2.5YR8/1灰白	SK3Y				濱田：美濃：幕末・明治時代 内外面：透明釉
	24	陶器	土瓶		(80)	2 外面：2.5YR7/2灰黃 脱土：2.5YR7/2灰黃	SK3F+Y				相馬？：19世紀・幕末	
	25	陶器	瓶		(50)	4 外面：7.5Y7/1灰白 内面：7.5Y7/1灰白 脱土：N8/0灰白	SK3F				在地 内外面：灰釉 内面：胎土目	
	26	陶器	盆	(88)	(38)	30	4 外面：2.5GY明オリーブ灰 内面：2.5Y7/1灰白 脱土：5Y7/1灰白	SK3F				在地：19世紀 内外面：灰釉 内面：胎土目

番号	遺物番号	種別	器種	計測値 (mm)			色調	出土地点	登録番号	備考
				口径	底径	器高				
	27	陶器	ミニ植木鉢	(68)			5 外面：5Y6/2灰オリーブ 内面：2.5Y7/1灰白 底上：2.5Y7/1灰白	SX3F		在地 内面：下部2/3無釉
12	28	磁器	植木鉢	(68)			6 外面：青 内面：2.5Y8/2灰白 底上：N8/0灰白	SX3F		明治時代以降
	29	陶器	甕	(127)			14 外面：10YR6/4に△、黄褐 内面：5Y6/3灰オリーブ 底上：10YR6/4に△、黄褐	SX3F		在地：10世紀・江戸末～明治時代 外面：ヘラ削り、鉄輪
	30	瓦器	コンロ？	(186)			10 外面：7.5YR3/1暗褐 内面：10YR2/1黒褐 底上：2.5YR6/1灰白	SX3F		明治以前
	31	土製品	径：	23			4 外面：7.5YR6/8褐	SX3F		
	32	土製品	焼台の棚？	長：29			底上：7.5YR6/6褐	SX3F		下部：釉付着
13	33	金属製品	煙管の吸口	長：69	幅：11	厚：11 重さ：9.2g		SX3F	RM3	軫製。中に羅字（竹）残存
	34	金属製品	銅鏡	径：23.4		厚：1.1 重さ：22g		SX3F		跡名：寶永通寶
	35	瓦	軒丸瓦				19 外面：5Y3/1オリーブ黒 底上：5Y8/1灰白	SX3F		黒瓦 右三つ巴紋
	36	瓦	丸瓦				15 外面：5Y4/1灰 底上：2.5Y5/2暗灰黃	SX3F		黒瓦
	37	瓦	平瓦				19 外面：7.5YR3/4暗褐 底上：5YR6/6褐	SX3F		赤瓦
	38	青磁	碗				5 外面：2.5GY5/1オリーブ灰 内面：5GY6/1オリーブ灰 底上：7.5Y5/1灰	FE10-91		中国（龍泉窯）：15世紀？ 内外面：青磁釉
	39	青磁	碗				4 外面：2.5GY7/1オリーブ灰 内面：5CY7/1明オリーブ灰 底上：N7/0灰白	FE12-91		中国（龍泉窯）：16世紀？ 内外面：青磁釉 外面：蓮瓣文
	40	磁器	皿	(113)			2 外面：5GY8/1灰白 内面：5GY8/1灰白 底上：5Y8/1灰白	西区M層		中国（景德镇）：16世紀 青花盤 被熱
	41	磁器	皿	(108)			3 外面：10Y7/1灰白 内面：2.5YC7/1明オリーブ 底上：5Y7/1灰白	西区M層		中国（景德镇）：16世紀？ 被熱
	42	磁器	皿				3 外面：7.5GY8/1明緑灰 内面：7.5GY8/1明緑灰 底上：N8/0灰白	FE11-90		中国（景德镇）：16～17世紀 内外面：透明釉 高台：砂付着
	43	磁器	皿	(78)			3 外面：N8/0灰白 内面：N8/0灰白	FE10-92		中国（景德镇）：16～17世紀 内外面：透明釉 高台：砂付着
	44	珠洲	甕				16 外面：5Y5/1灰 内面：5Y6/2灰オリーブ	FE10-95		中世陶器 内面：アマ痕 外面：サタキ
14	45	陶器	甕				10 外面：2.5YR3/2暗赤褐 内面：2.5YR5/2暗灰黃	FE10-92		中世陶器 内面：アマ痕 外面：自然釉
	46	瓷器系陶器	甕				10 外面：5YR2/4暗赤褐 内面：10YR4/2灰黃 底上：2.5YR7/1灰白	西区M層		中世陶器
	47	陶器	甕	(134)			11 外面：5YR3/2暗赤褐 内面：7.5Y4/4灰 底上：2.5Y16/2灰白	西区M層		产地：不明・中世？ 預
	48	陶器	天目茶碗	(114)	42	73	5 外面：2.5Y2/1黒 内面：2.5Y2/1黒 底上：5Y8/1灰白	FE10-93 FE10-93 FE09-93 T-5		瀬戸・美濃：17世紀初頭 内外面：鉄輪 外面：下部無釉、削り
	49	陶器	天目茶碗	(38)			7 外面：2.5Y1.7/1赤黒 内面：2.5Y1.7/1赤黒 底上：2.5Y7/1灰白	FE09-96		瀬戸・美濃：17世紀初頭 内外面：鉄輪 外面：下部無釉、削り
	50	陶器	皿	(106)	(57)	21	5 外面：7.5Y8/2灰白 内面：7.5Y8/2灰白	FE10-92		瀬戸・美濃：16世紀後半 折線彫刻 削文
	51	陶器	皿	(114)	(60)	24	7 外面：7.5Y7/3浅黄 内面：7.5Y7/3浅黄 底上：7.5YR7/4に△	FE10-93		瀬戸・美濃：16世紀後半 見込み・印伝の菊文 灰輪
	52	陶器	皿	(104)	(56)	23	6 外面：5Y7/3浅黄 内面：5Y7/4浅黄 底上：2.5Y8/2灰白	FE13-89 X層		瀬戸・美濃：16世紀後半 灰輪
	53	陶器	茶入れ？	(62)	(46)	59	5 外面：7.5YR3/4暗褐 内面：7.5YR3/4暗褐 底上：10YR6/2灰白	FE10-93		瀬戸・美濃：江戸時代 内外面：鉄輪

排図 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)				色調	出土 地点	登録 番号	備考
				口径	底径	高さ	器厚				
54	陶器	碗		55	7	10788/1 底白 内面: 5G77/1 明暦灰 胎土: 7.5YR6/4 に赤い斑	西区VI層		唐津: 16世紀? 見込み: 剥り出し 外音: 底部削り		
55	陶器	碗		48	7	外面: 5Y5/3 オリーブ黄 内面: 5Y5/3 オリーブ黄 胎土: 7.5Y7/2 灰黄	西区VI層		唐津: 17世紀後半～18世紀前半		
56	陶器	皿		38	4	外面: 2.5Y3/2 黒墨 内面: 10Y5/2 オリーブ灰 胎土: 2.5Y5/2 黒灰黄	T5		唐津: 16世紀末 内音: 胎土目 高台: 剥り出し		
57	陶器	皿		25	6	外面: 7.5YR6/2 底灰 内面: 2.5Y4/2 類赤黄 胎土: 7.5Y6/4 に赤い斑	西区VI層		唐津: 16世紀後半 見込み: 朝鮮焼き出し? 内音: 剥り出し 高台: 剥り出し		
58	陶器	皿	(112)	42	35	5	外面: 5Y5/3 底オリーブ 内面: 5Y5/3 オリーブ黄 胎土: 7.5Y6/1 黄灰	FE10-92	唐津: 16世紀末～17世紀(折緑田) 内音: 下部無釉、削り 高台: 剥り出し		
59	陶器	皿?		43	7	外面: 10Y5/2 底黄褐 内面: 5Y5/3 底オリーブ 胎土: 7.5Y7/6 灰	西区VI層		唐津: 16世～17世紀初 見込み: 胎土目 高台: 剥り出し		
60	陶器	皿	(120)	42	25	6	外面: 7.5YR6/6 灰 内面: 2.5Y7/2 底灰黄 胎土: 7.5YR6/6 灰	FE11-90	唐津: 17世紀前半 外音: ロクロ 底部: 剥り、砂目 高台: 剥り出し		
61	磁器	皿	(84)		15	外面: 2.5Y6/1 黄灰 内面: 5Y6/2 オリーブ 胎土: 2.5Y6/1 黄灰	FE10-93	唐津: 大皿? 内音: 胎土目 外音: 剥り			
62	陶器	甕		104	6	外面: 10R2/1 赤褐 内面: 2.5YR3/2 底赤褐 胎土: 2.5YR3/4 に赤い赤褐	FE10-95	唐津: 江戸時代 底部: 墨書き			
63	陶器	碗	(108)	42	62	4	外面: 10Y7/1 底白 内面: 2.5Y7/1 明暦灰 胎土: 2.5Y7/1 底白	西区VI層		大船馬: 明治以降	
64	陶器	擂鉢			8	外面: 5YR4/4 に赤い赤褐 内面: 5YR5/4 に赤い赤褐 胎土: 5YR4/1 底灰			在地: 18～19世紀?(江戸時代) 内音: 鈍目 内面: 銘輪		
65	陶器	擂鉢			9	外面: 7.5YR4/2 底灰 内面: 5YR5/2 底灰 胎土: 7.5YR3/3 底褐	西区VI層		在地: ? 19世紀(江戸時代) 内音: 鈍目 外音: 銘輪		
66	陶器	擂鉢 植木鉢転 用?		70	10	外面: 7.5YR4/3 灰 内面: 7.5YR4/3 灰 胎土: 7.5YR4/3 灰	西区VI層		在地: 19世紀 内音: 鈍目、目跡 内面: 鋼袖 底部: 穿孔		
67	陶器	擂鉢	(130)		13	外面: 10Y4/4 灰 内面: 10Y8/2 に赤い赤褐 胎土: 10YR7/1 底白			在地: 明治時代以降 内音: 鈍目 外音: あめ釉		
68	陶器	秉樅	67	50	56	4	外面: 5YR5/3 に赤い赤褐 内面: 5YR4/4 に赤い赤褐 胎土: 10YR6/3 に赤い赤褐	XO		在地: 外面部上部: 鉄袖 底部: 回転式切り、穿孔	
69	陶器	秉樅			4	外面: 5YR3/3 類赤褐 内面: 5YR4/3 に赤い赤褐 胎土: 2.5Y6/2 底灰	西区VI層		在地: 外面部上部: 鉄袖		
70	陶器	秉樅		40		外面: 10YR6/2 底黄褐 胎土: 10YR6/2 底黄褐	西区VI層		底部: 回転式切り、穿孔		
71	陶器	秉樅	56	41	26	3	外面: 2.5YR4/3 灰 内面: 2.5YR4/3 灰 胎土: 7.5YR6/3 に赤い褐	西区VI層		在地: 外面部上部: 鉄袖 外音: 底半無袖 底部: 回転式切り	
72	陶器	不明			15	外面: 10YR7/4 に赤い黄褐 内面: 10YR7/4 に赤い黄褐 胎土: 10YR8/3 類黄褐	西区VI層		ロクロ整形 上部が円形に閉じる?		
73	磁器	碗			3	外面: 2.5GY8/1 底白 内面: 2.5GY8/1 底白 胎土: N8/0 底白	西区VI層		瀬戸・美濃: ? 19世紀・江戸 内音: 透明釉		
74	磁器	碗	(106)	(38)	54	3	外面: 5GY8/1 底白 内面: 10Y8/1 底白 胎土: 5Y8/1 底白	西区VI層		瀬戸・美濃: ? 19世紀 見込み: 透かし龍 内音: 透明釉	
75	磁器	碗		(29)		7	外面: N8/0 底白 胎土: 2.5Y8/1 底白	T4		瀬戸・美濃: 幕末～明治	
76	磁器	碗				5	外面: 5GY灰白 内面: 5GY灰白 胎土: N8/0 底白	西区VI層		瀬戸・美濃: 幕末～明治 高台内朱書き 顔ざしあり	

種別 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)				色調	出土 地點	登録 番号	備考
				口径	底径	器高	器厚				
	77	磁器	碗	Φ80		4		外面：100Y7/1 明暦灰 内面：100Y7/1 明暦灰 胎土：25Y8/1 黄白	西区M層		肥前：17～18世紀 有磁、質熟 内外面：青磁釉
	78	磁器	碗	(118)	(50)	65	4	外面：N8/0 灰白 内面：N8/0 灰白 胎土：N8/0 灰白	FE11-90		肥前？ 7世紀後半？ 高台内：「大明□□」？
	79	磁器	碗	(86)	30	42	4	外面：5GY8/1 灰白 内面：5GY8/1 灰白 胎土：5Y8/1 灰白	西区M層		肥前？ 18世紀 外面：青磁草花文、體付砂目 内外面：透明釉
	80	磁器	碗	(103)		3		外面：5GY8/1 灰白 内面：10Y8/1 灰白 胎土：7.5Y8/1 黄白	FE10-92		肥前？ 18世紀 外面：白色 内外面：透明釉
	81	磁器	小杯	Φ40	28	44	3	外面：10BG7/1 明青灰 内面：N7/0 灰白 胎土：7.5Y8/1 灰白	FE13-90		肥前？ 17世紀後半 高台内：透明釉 内外面：透明釉
17	82	磁器	碗	(66)		3		外面：5GY8/1 灰白 内面：5GY8/1 灰白 胎土：5Y8/1 黄白	西区M層		肥前？ 18世紀末～19世紀初め 広東燒 内外面：灰釉
	83	磁器	皿			5		外面：5BG7/1 明青灰 内面：5BG7/1 明青灰 胎土：2.5Y7/1 黄白	西区M層		肥前？ 17世紀・江戸
	84	磁器	碗		43	3		外面：N7/0 灰白 内面：7.5GY7/1 明暦灰 胎土：7.5Y8/1 黄白	XO		肥前？ 17世紀中葉 高台：砂付着
	85	磁器	皿	(116)		4		外面：5B7/1 明暦灰 内面：5B7/1 明青灰 胎土：N8/0 灰白	西区M層		肥前？ 19世紀・江戸 内外面：透明釉
	86	磁器	鉢			6.5		胎土：N8/0 灰白	西区M層		肥前系？ 19世紀・江戸 内外面：透明釉 焼き緋赤
	87	磁器	戸車 種：G9			7		外面：2.5Y8/2 灰白 内面：5Y8/1 灰白	FE11-90		肥前？
	88	磁器	碗	Φ80		5		外面：7.5Y7/1 灰白 内面：7.5Y7/1 灰白 胎土：5G7/1 黄白	西区M層		波佐見？ 18世紀 内外面：透明釉
	89	磁器	碗	Φ80	(35)	47	4	外面：2.5GY8/1 灰白 内面：2.5GY8/1 灰白 胎土：N8/0 灰白	FE10-95		波佐見？ 18世紀 外側：青磁草花文 内外面：透明釉
	90	磁器	皿			8		外面：5GY8/1 灰白 内面：5GY8/1 灰白 胎土：10Y8/1 灰白	西区M層		波佐見？ 18世紀 見込み？ 二重輪廻菊文 外面：二重網口目
	91	磁器	皿	(135)	86	40	4	外面：10Y8/1 灰白 内面：5GY8/1 灰白 胎土：7.5W8/1 黄白	西区M層		波佐見？ 18世紀(V2, 3期) 蛇ノ目輪高台
18	92	磁器	鉢	(176)	102	61	8	外面：7.5G12/1 明暦灰 内面：7.5G12/1 明暦灰 胎土：N8/0 灰白	西区M層		波佐見？ 18世紀 見込み？ コンニャク印判五花文 内面：青磁他 外面：草花文
	93	磁器	碗	Φ80		5		外面：10W6/2 ピーパ灰 内面：10W6/2 ピーパ灰 胎土：2.5Y7/1 黄白	西区M層		大堀相馬？ 18世紀 内外面：灰釉
	94	磁器	碗		43	3		外面：5GY8/1 灰白 内面：5GY8/1 灰白 胎土：7.5W8/1 黄白	T4		在地：19世紀 見込み？ 文字？ 脈の剥がれ 高台内：透明 内外面：灰釉
	95	磁器	碗	(117)	52	30	4	外面：5Y7/1 灰白 内面：5Y7/2 灰白 胎土：2.5Y7/2 灰黃	西区M層		在地：19世紀 見込み？ 脱胎？ 脈の剥がれ 高台内：透明 内外面：灰釉
	96	かわらけ	皿	Φ80	(68)	14	5	胎土：7.5YR7/6 相	西区M層		ロクロ整形 底部：回転系切り、墨書き
	97	かわらけ	皿	Φ80	(48)	24	5	胎土：10YR6/4 にふい棒	西区M層		ロクロ整形 底部：回転系切り→削で？
19	98	かわらけ	皿	(106)	(57)	26	6	胎土：7.5YR7/4 にふい棒	FE11-90 XO		ロクロ整形 底部：回転系切り
	99	かわらけ	皿	(114)	(57)	28	4	胎土：10YR8/3 戻黄棒	FE10-92		ロクロ整形 底部：回転系切り
	100	かわらけ	皿		56		5	胎土：7.5YR7/4 にふい棒	西区M層	RP2	ロクロ整形 底部：回転系切り
	101	かわらけ	不明		28	22	6	胎土：10YR7/4 にふい棒	西区M層		穿孔？

排図 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)				色調	出土 地点	登録 番号	備考
				口径	底径	器高	器厚				
	102	土師質土器	不明	86	14	外面：7.5YR7/4に赤い粒 内面：7.5YR8/4浅黄褐 胎土：T3.0暗灰		西区VI層			三脚か？
19	103	土製品	ミニチュア土器	上径：32 下径：45	19	5 胎土：10YR7/3に赤い粒		FE10-95			内面：ヘラナデ 外側：指圧痕
	104	土製品	焼台？	上径：78 下径：80	18	7 胎土：7.5YR7/4に赤い粒		西区VI・IX層			内面：円錐形にナデ 外側：指圧痕
	105	土製品	土踏		5 胎土：7.5YR6/6 棕			FE08-96	RQ8		
	106	瓦	軒丸瓦		15 外面：T3.0灰 胎土：5Y7/1 白			FE10-96			黒瓦 木瓜紋
	107	瓦	軒丸瓦		16 外面：2.5Y7/2灰黄褐 内面：2.5Y7/2灰黄褐 胎土：2.5Y8/3 淡黄			FE13-90			黒瓦 右三つ巴紋
20	108	瓦	丸瓦		30 外面：5Y5/1 灰 胎土：2.5Y6/1 黄灰			西区IX層			黒瓦 穿孔あり
	109	瓦	丸瓦		23 外面：5Y5/1 灰 内面：10YR7/1 白			西区IX層			黒瓦 外側：刻印「ハツ菊紋」
	110	瓦	丸瓦		30 外面：5Y5/1 灰 内面：2.5Y7/6明黄褐			西区VI層			黒瓦
	111	瓦	軒平瓦		20 外面：N4/0灰 胎土：5Y7/1 白			FE10-98			黒瓦 穿孔
	112	瓦	曳瓦		24 外面：2.5Y4/3オーリーブ褐 胎土：2.5YR4/4に赤い粒		XO				赤瓦
21	113	瓦	軒丸瓦		17 外面：5Y4/2灰褐 胎土：2.5YR6/6 棕			T4			赤瓦 木瓜紋
	114	瓦	軒丸瓦		29 外面：2.5YR3/3暗赤褐 胎土：2.5YR3/1 黑褐			FE13-90			赤瓦 右二つ巴紋 内側：大崩れ破損
	115	瓦	桟瓦		22 外面：2.5YR3/3暗赤褐 胎土：2.5YR5/6 明赤褐			FE10-98			赤瓦
	116	石製品	硯石	幅：65	63			FE10-95			硯面4(表裏、内側面)
22	117	石製品	硯石	幅：60	17						硯面4(表裏、内側面) 硯頭が明確に残る
	118	石製品	硯石	長：104 幅：65	28						硯3(表、内側面)
	119	石製品	石臼	径：(300)	高：111 厚：60			T5			上臼 一部赤褐色、要付着、被熱？
	120	石製品	硯					西区IX層			
	121	石製品	硯	幅：47	厚：10			T5			
	122	石製品	硯	幅：59	厚：14			西区IX層			
23	123	石製品	不明	径：21	7			FE11-94 VI層	RQ9	中央部：穿孔	
	124	石製品	硯石	幅：55				T2 III層	RQ1		石臼：安山岩 中央部：工具痕 金剛石付着、底面欠損
	125	金属製品	刀子の柄？	長：98 幅：16	厚：6 重さ：20.5g			12-90 IX層			鋼の巻きで既に木を挟む 片面に装飾痕？
	126	金属製品	簪？	長：74 幅：4	厚：4 重さ：3.5g			FE12-90 VII層			鋼製・棒状
	127	金属製品	鋼鍔	径：(24.0)	厚：1.3 重さ：23g			西区IX層			鍔名：祥符通寶
	128	金属製品	鋼鍔	径：25.0	厚：1.2 重さ：25g			FE11-94 VI層	RM10	鍔名：皇宋通寶	
	129	金属製品	鋼鍔	径：23.6	厚：1.2 重さ：28g			FE10-9 VI層	RM6	鍔名：照寧元寶	
	130	金属製品	鋼鍔	径：24.1	厚：1.1 重さ：26g			FE09-94 VI層	RM5	鍔名：元豐通寶(行書体)	
	131	金属製品	鋼鍔	径：25.0	厚：1.2 重さ：26g			FE12-90 VII層			鍔名：永樂通寶
	132	金属製品	鋼鍔	径：25.0	厚：1.3 重さ：28g			FE09-93 VI層			鍔名：永樂通寶
	133	金属製品	鋼鍔	径：25.4	厚：1.5 重さ：30g			FE10-91 VI層			鍔名：永樂通寶
	134	金属製品	鋼鍔	径：24.2	厚：1.3 重さ：28g			FE12-88 VI層			鍔名：寛永通寶
	135	金属製品	鋼鍔	径：24.8	厚：1.2 重さ：28g			FE13-90 VI層	RM4	鍔名：寛永通寶(新寛永)	
	136	金属製品	鋼鍔	径：24.2	厚：1.6 重さ：33g			FE13-89			鍔名：□永□ 表面に鉄片付着
	137	金属製品	鋼鍔	径：24.2	厚：1.0 重さ：27g			X-O			鍔名：不明
	138	金属製品	鋼鍔	径：24.0	厚：1.3 重さ：23g			FE09-97 VI層	RM7	鍔名：不明	
	139	金属製品	鋼鍔	径：24.8	厚：1.0 重さ：18g			FE12-90 IX層			鍔名：不明 蓋み丸。

種別 番号	遺物 番号	器種	計測値 (mm)				色調	出土 地点	登録 番号	備考
			口径	底径	器高	器厚				
	140	陶器	焼台	径:86	9	7	外面:10YR6/2 底黄褐 腹土:10YR7/2 にぶい黄褐	FE11-88 X層		上部:重ね痕 表裏:削り調整
	141	陶器	焼台	径:(156)	6	4	外面:2.5Y6/2 底黄	FE11-87		上部:重ね痕 底部:鈎型痕
	142	陶器	焼台	径:(180)	5	5	外面:2.5Y6/2 底黄	複乱		上部:輪付着 表裏:削り調整、鈎型痕
	143	陶器	焼台	径:72	13	5	外面:10YR8/1 底白 腹土:10YR7/2 にぶい黄褐	複乱		底部:「一」 5脚
	144	陶器	焼台	径:68	13	7	外面:2.5Y8/2 底白 腹土:7.5YR6/3 にぶい褐 腹土:7.5YR7/3 にぶい褐	複乱		底部:「二」 4脚
	145	陶器	焼台	径:59	11	6	外面:2.5Y6/2 底黄 腹土:2.5Y6/2 底黄	複乱		底部:「三」 4脚
25	146	陶器	焼台	83	15	9	外面:7.5YR5/3 にぶい褐 腹土:10YR7/1 底白	T2		上面:回転系切り 底部:「3」へラ書き 5脚
	147	陶器	焼台	径:103	18	11	外面:7.5YR6/3 にぶい褐 腹土:2.5YR7/1 底白	T2		上面:回転系切り 側面、下部に種 底部:「3.5」へラ書き 5脚
	148	陶器	焼台	径:114	21	11	外面:10YR6/3 にぶい黄褐	FE14-89		上面:回転系切り 脚部:輪付着 底部:「4」へラ書き 5脚
	149	陶器	焼台	径:125	20	12	外面:7.5YR6/3 にぶい褐 腹土:7.5YR7/4 にぶい褐	複乱		上面:回転系切り 底部:に数字「4.5」へラ書き 5脚
	150	陶器	焼台	径: (176)	24	15	外面:7.5YR6/4 にぶい黄褐 腹土:10YR7/2 にぶい黄褐	FE11-89		底部:「6.5」へラ書き 脚部欠損
	151	陶器	湯呑	(77)	39	54	3 内外面:7.5Y7/2 底白 腹土:2.5Y8/1 底白	複乱		20世紀 体部:「横山」
	152	陶器	湯呑	680	36	79	3 内外面:2.5Y8/3 淡黄 腹土:2.5Y8/2 底白	複乱		20世紀 体部:「山形削印」 深井 赤み、釉垂れあり
	153	陶器	土瓶	(86)	64	110	5 外面:5Y7/2 底白 腹土:2.5Y8/1 底白	複乱		体部:「山形」、「進徳」 外面:「内蔵14年那:透明釉
	154	陶器	井	(168)	62	76	6 内外面:10Y8/1 底白 腹土:10Y7/4 にぶい黄褐	FE14-90		体部:「山形」、「進徳」 内面見込みに日直
26	155	磁器	碗	94	32	52	3 内外面:N8/0 底白	複乱		子供用の茶碗? 時代:昭和初期、戦前?
	156	ガラス	クリーム瓶	46	48	42	3			底部:「口被密閉」 規:「白コロンブス」
	157	ガラス	インク瓶	18	42	51	3			底部:「SSS」 サンエス万年筆
	158	ガラス	インク瓶	24	40	64	2			底部:「SMCO」 鶴崎ライントインキ 規:「(株) ライト」
	159	ガラス	薬瓶	16		116	2			昭清牛乳病院、衛生病院のもの?
	160	ガラス	目薬容器	16		長:84	1			体部:「ROHTO」 規:「ロート製薬 (株)」

V 理化学分析

1 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

A 測定対象試料

測定対象試料は、SX23（性格不明遺構）F2（覆土2層）出土木炭（No.1：IAAA-121748）、SP85（ビット）F1（覆土1層）出土木炭（No.2：IAAA-121749）の合計2点である（表3）。2点の試料は残存最外年輪側から採取された。なお、同一試料の樹種同定が実施されている（樹種同定報告参照）。

B 測定の意義

この遺跡では、全体的に遺物を含む遺構が少ないため、遺構の年代を明らかにするために年代測定を行う。

C 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸・アルカリ・酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、 0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表3に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 減度 ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（表3）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{13}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{13}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{13}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。

(4) 歴年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 減度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。歴年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の歴年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標

標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 4 に示した。曆年較正年代は、 ^{14}C

年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

F 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、SX23(性格不明遺構) F2(覆土 2 層) 出土木炭 No.1 が 400 ± 20 yrBP, SP85(ピット) F1(覆土 1 層) 出土木炭 No.2 が 520 ± 20 yrBP である。曆年較正年代 (1σ) は、No.1 が 1447 ~ 1478 cal AD の範囲、No.2 が 1410 ~ 1427 cal AD の範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも 70% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51(4), 1111-1150
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

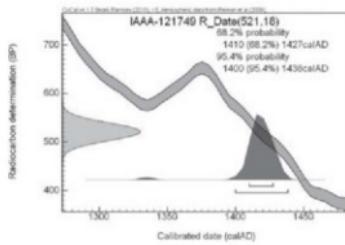
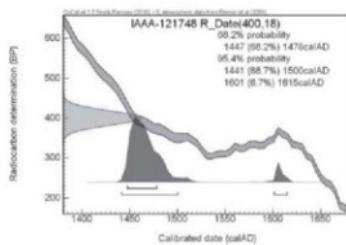
表 3 資料補正表

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Liber Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-121748	No.1	SX23 (性格不明遺構) F2 (覆土 2 層)	木炭	AAA	-24.75 \pm 0.32	400 \pm 20	95.13 \pm 0.22
IAAA-121749	No.2	SP85 (ピット) F1 (覆土 1 層)	木炭	AAA	-23.90 \pm 0.37	520 \pm 20	93.17 \pm 0.22

表 4 曆年較正年代表

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-121748	400 \pm 20	95.18 \pm 0.21	400 \pm 18	1447calAD - 1478calAD (68.2%)	1441calAD - 1500calAD (88.7%) 1601calAD - 1615calAD (6.7%)
IAAA-121749	520 \pm 20	93.92 \pm 0.21	520 \pm 18	1410calAD - 1427calAD (68.2%)	1400calAD - 1438calAD (95.4%)

[参考値]



第 27 図 曆年較正年代グラフ

2 樹種同定

(株) 加速器分析研究所

はじめに

山形城三の丸跡から出土した炭化材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

A 試 料

試料は、SX23（性格不明遺構）F2（覆土2層）出土炭化材（No.1）、SP85（ピット）F1（覆土1層）出土炭化材（No.2）の合計2点である（表5）。なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施されている（年代測定報告参照）。

B 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東

（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

C 結 果

炭化材は2点とも広葉樹のブナ属に同定された（表5）。解剖学的特徴等を以下に記す。

- ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、單列、數細胞高のものから複合放射組織まである。

D 考 察

炭化材No.1は、芯去りミカン割状を呈し、元の大きさは直径4.5cm以上と推定される。炭化材No.2は、不定形の破片である。これらの炭化材は、いずれもブナ属に同定された。ブナ属は、冷温帶落葉広葉樹林の主要な構成種であるブナが含まれる。ブナ属の木材は、比較的重硬で強度が高い材質を有する。

本地域では、現在でも盆地を囲む山地にブナ属が分布しており、入手が容易な木材を利用したことが推定される。

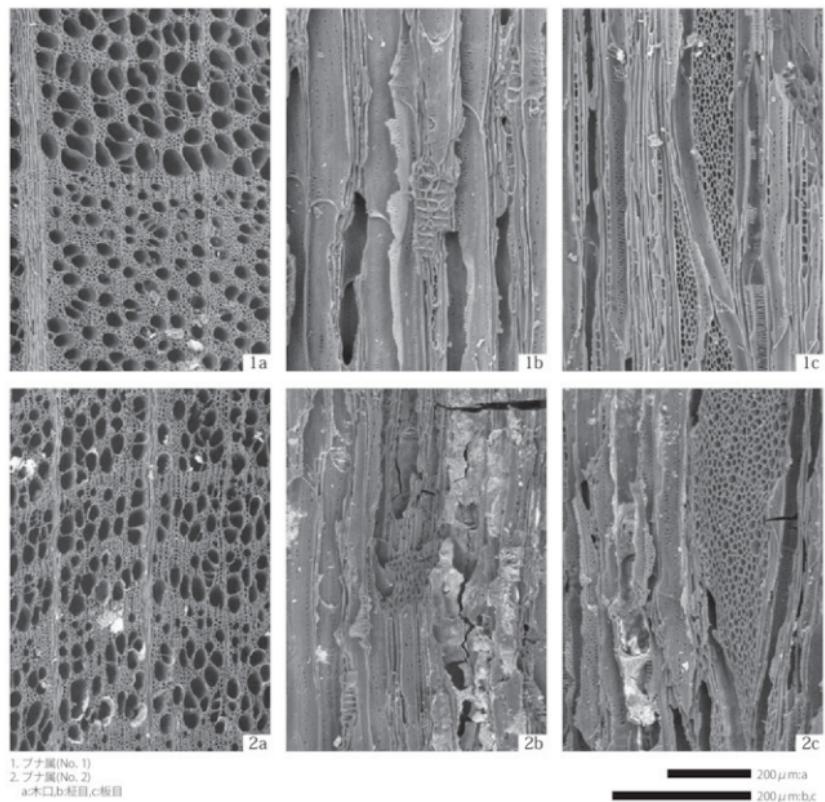
なお、この分析はパリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

引用文献

- 林 昭三 1991 「日本産木材 跡微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」 木材研究・資料31 p.81-p.181 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」 木材研究・資料32 p.66-p.176 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」 木材研究・資料33 p.83-p.201 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」 木材研究・資料34 p.30-p.166 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」 木材研究・資料35 p.47-p.216 京都大学木質科学研究所
 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 p.176 地球社
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修) p.122 海青社

表5 樹種同定結果

試料番号	出土地点	形状	種類
No.1	SX23（性格不明遺構） F2（覆土2層）	芯去りミカン割状（直径4.5cm以上）	ブナ属
No.2	SP85（ピット） F1（覆土1層）	破片	ブナ属



第 28 図 炭化材組織顕微鏡写真

3 骨 同 定

(株) 加速器分析研究所

はじめに

山形城三の丸跡から出土した骨の種類を明らかにするための骨同定を実施する。

A 試 料

試料は、No.3～5の3試料である。それぞれの試料は、No.3がSK62Fより採取された10点、No.4がFE13-92から採取された10点、No.5がFE11-97から採取された2点とFE10-89から採取された1点の合計23点である。

B 分析方法

一部の試料については、一般作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。なお、年齢に関しては、幼児が1～5歳程度、小児が6～15歳程度、成人が16歳程度以上、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、老年が40～59歳程度、老年が60歳以上を表す。

C 結 果

結果を表6に示す。検出された種類は、ヒト、およびウマ/ウシである。以下、試料ごとに結果を示す。なお、表4中の数量は最小個体数で示されており、上述の破片数と一致しない場合がある。

・No.3 SK62F

ヒトの頭頂骨、頭蓋骨、指骨(中節骨)、趾骨(基節骨/中節骨)、脛骨遠位端の可能性がある破片、左距骨、蹠骨の可能性がある破片、足根骨(舟状骨)の可能性がある破片、四肢骨が同定された。頭頂骨および頭蓋骨では、縫合部が観察され、外側が閉じていないものの、内側が閉じている状況がみられる。いずれも焼骨である。

・No.4 FE13-92

ヒトの左頭頂骨、後頭骨、左側頭骨、右上腕骨(骨体・遠位端片)、上腕骨近位端である。左頭頂骨と後頭骨は接合関係にある。矢状縫合およびラムダ縫合は内側・外側とも閉じていない。また、右上腕骨は、全体的に細く、

短い。いずれも焼骨である。

・No.5 FE11-97

ヒトの右上頸骨、下頸骨がみられる。右上頸骨は中切歯～第1大臼歯部の歯根部が開放しているのが確認される。下頸骨は正中部付近が残存し、右中切歯・右側切歯の歯根部が開放しているのが確認される。いずれも焼骨である。

・No.5 FE10-89

ウマ/ウシの四肢骨の可能性がある破片である。骨端部が確認されるが、未化骨状態で骨端が外れている。焼けていない。

D 考 察

SK62F、FE13-92、FE11-97で出土した骨は、いずれも白色を呈しており、表面にひび割れが生じるなど、焼骨の特徴を示しており、火葬骨の可能性が考えられる。SK62Fで出土した人骨は、頭頂骨および頭蓋骨にみられる縫合部において外側が閉じていないものの、内側が閉じていることから、本人骨は、熟年以降と考えられる。

FE13-92で出土した人骨は、矢状縫合およびラムダ縫合において内側・外側とも閉じていない。このことにより、本人骨は壮年前半よりも若い個体と考えられる。右上腕骨は、被熱による変形・収縮の可能性を考慮しても極めて細く、また短いことから、小児程度の可能性もある。なお、上腕骨では、遠位端、近位端が骨体と離れているが、破損した状況であるため、化骨化しているか不明である。また、外後頭骨隆起はそれほど発達していないが、成人に達していないことから女性と断定するにはいたらない。

FE11-97で出土した人骨は、部分的な出土であり、上下頸骨のみである。ただし、上頸骨にみられる歯根の形跡は永久歯であり、第1大臼歯が萌出している点を考慮すると、小児以降であると考えられる。

FE10-89で出土したウマ/ウシ四肢骨の可能性がある破片は、骨端部が未化骨であることから若齢であると判断される。また、骨端と逆側に割れた痕跡が認められるが、破損した状態で埋納されたものか、埋没後の経年変化によって破損したものか定かでない。

なお、この分析はパリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

表6 骨同定結果

試料番号	出土地点	種類	部位	左	右	状態	数量	被熱	備考
No.3	SK62F	ヒト	頭頂骨			破片	1	○	
			頭蓋骨			破片	1	○	
			指骨(中節骨)			ほぼ完形	1	○	
			指趾骨(基節骨/中節骨)			近位端欠	1	○	
			腓骨?			遠位端?	1	○	
			距骨	左		破片(2片、接合せず)	1*	○	
			踵骨?			破片	1	○	
			足根骨(舟状骨)?			破片	1	○	
No.4	FE1392G	ヒト	四肢骨			破片(1片と小破片1)	1*	○	
			頭骨	左		破片(3片接合)	1	○	後頭骨と接合
			後頭骨			破片(2片接合)	1	○	後頭骨と接合
			側頭骨	左		難解部	1	○	
			上腕骨	右		骨体	1	○	
			下腕骨	右		遠位端片	1	○	
			近位端			近位端	2	○	
No.5	FE1197G	ヒト	上顎骨	右		H1-M1部	1	○	
			下顎骨			正中部周辺	1	○	
	FE1089G	ウマ/ウシ?	四肢骨			破片	1	×	骨端未化骨外れ

注) 数量は最小個体数を示す。破片が複数の場合は「状態」欄に特記した。



1. ヒト頭頂骨(No.3 SK62F)
 2. ヒト頭蓋骨(No.3 SK62F)
 3. ヒト指骨中節骨(No.3 SK62F)
 4. ヒト距骨?(No.3 SK62F)
 5. ヒト左距骨(No.3 SK62F)
 6. ヒト距骨?(No.3 SK62F)
 7. ヒト足根舟状骨(No.3 SK62F)
 8. ヒト指趾骨基節骨/中節骨(No.3 SK62F)
 9. ヒト四肢骨(No.3 SK62F)
 10. ヒト左頭頂骨(No.4 FE13-92)
 11. ヒト後頭骨(No.4 FE13-92)
 12. ヒト左側頭骨(No.4 FE13-92)
 13. ヒト上腕骨近位端(No.4 FE13-92)
 14. ヒト右上腕骨(No.4 FE13-92)
 15. ヒト右上腕骨遠位骨(No.4 FE13-92)
 16. ヒト右上腕骨(No.5 FE11-97)
 17. ヒト下顎骨(No.5 FE11-97)
 18. ウマ/ウシ? 四肢骨(No.5 FE10-89)

第29図 出土骨写真

VI 調査のまとめ

今回の調査は、「山形法務総合庁舎新営事業」に伴なう山形城三の丸跡第12次発掘調査である。調査によって得られた成果を以下に述べる。

第12次の調査区は、山形市大手町に所在し、JR山形駅の北へ約1.0kmに位置する山形法務総合庁舎の敷地内の建物南側にある舗装された駐車場であり、調査面積は約910m²である。標高は約136.20mを測る。

この場所は、古地図や石碑から、山形藩の最後の藩主である水野忠弘に仕えた主席家老の水野三郎右衛門元宣の屋敷が存在した所であったことから、その痕跡が検出されるのはと期待された。しかし、水野邸らしき痕跡は皆無で、明治時代以降に埋められたと推定されるガラスやトタン、瓦礫、煉瓦などを含む土が堆積している状況であった。

そこで、水野元宣の死後の屋敷跡の変遷を「山形警察史（上巻）」や「山形市史（下巻）」、「山形市史（年表・索引編）」、「山形県史（年表・別編III）」などから辿ると、下記のようであった。

明治2年（1869）三郎右衛門の処刑後に屋敷は官に没収。

明治8年（1875）懲役場（現：刑務所）を設置。

明治10年（1877）山形監獄署を建設。

明治13年（1880）前年に火災で焼失した未決監倉獄署を監獄署の隣地に建設。

明治16年（1883）収容者建物完成。

明治18年（1885）正面事務室完成。

明治24年（1891）山形監獄署を新築。

昭和37年（1962）移転により刑務所建物の取り壊し。

昭和38年（1963）公園として整備。

昭和42年（1967）山形法務総合庁舎建設。

また、直接の影響は無かったものの、明治27年（1894）山形南部大火、明治44年（1911）山形北部大火が近隣で発生している。

以上のような、監獄署（現：刑務所）の建設や取り壊し、近隣の火災、公園整備、現在の庁舎建物の建設などの影響を受けたため水野邸の跡は削平されたと考えられる。

しかし、地表下約1.6～1.8mの深さから土坑や溝跡などの遺構が検出され、埋め立てられた土や遺構の覆土から瓦、陶磁器、礎石、古銭などが出土した。但し、調査区全体が前述のような削平や搅乱を受けていたためか遺構、遺物ともに保存状態は良くない。

遺構は、土坑、溝跡、柱穴、性格不明遺構が検出された。遺物が出土した遺構が限られるため、その時期や詳細は判然としないが、概ね18世紀後半から20世紀初頭の近世・近代に掘られたと考えられる。

特徴的なものとしては、土師質土器の皿1点が出土したSK59、焼骨片が出土したSK62、ゴミ捨て穴とも思われるSK64やSX3などが挙げられる。

SK59は、フ拉斯コ状に掘られていることや人為的に一気に埋められた土層の様子など他の遺構とは異なる様子が認められた。

SK62は覆土に焼土粒と炭化粒を含み、底面にも焼成の跡があり、火葬の墓坑と思われる様相であるが、規模が小さいことや、カマドのような石が設置されていること、そして出土した骨が部分的なこと（第V章）などから、さらに検討を要する。

SK64は、19世紀以降の陶磁器の破片がまとまって出土したこと、方形となる平・断面形態から、近代に掘られたゴミ捨て穴と考えられる。SX3もSK64と同様に多量の遺物片が出土しており、近代のゴミ捨て穴の様相を示すが、炭化物と焼土を多量に含む土層があること、底面に積んだような川原石の疊層がみられるなど、通常のゴミ捨て穴にはない特徴が認められる。

遺物は、埋め立てられた土中からの出土が大半を占め、陶磁器、瓦、石製品、金属製品などが出土した。

中には、二次焼成を受けている陶磁器、石臼、トタン、被熱した金属片が付着している礎石などがあり、火災などで排出された瓦礫が含まれていると考えられる。

多量に出土した瓦には、山形市教育委員会で行った山形城本丸跡発掘調査で出土している木瓜紋や八つ菊の刻印があるものもみられ、山形城で使用されていたことを窺わせるものもある。

陶磁器類の時期は、中世に属する15世紀後半～16世紀前半、17世紀～19世紀前半の近世、そして、19世紀末～戦前までの近代と3時期に大別され、掲載しなかったものを含め、近世・近代の遺物が多数を占める。主な産地は在地の他、中国の景德鎮、九州地方の肥前・唐津・波佐見焼、東海地方の瀬戸・美濃焼、福島県の大堀相馬焼などで、山形城の衰退期から幕末・明治までの各地域との流通の様子が窺える。また、様々な種類の焼台が多数出土したことは、窯場で梱包した荷が解かれず

に、この地に運ばれたことを物語る資料であり、刑務所関連の遺物は刑務所内の生活を垣間見れる資料である。そして、1点のみではあるが、礎石が出土したことは一定規模の建物の存在を示唆するものであろう。

残念ながら、水野三郎右衛門元宣の屋敷跡は確認できなかったが、多くの遺物と明らかな人為的痕跡が見つかったことで、当時の流通と廃城後の山形城三の丸跡地の様相の一端を解明することができた。

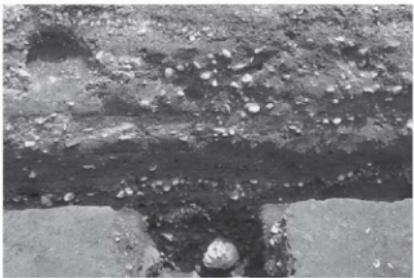
引用・参考文献

- 山形県警察史編さん委員会 1967『山形県警察史 上巻』
 陸原保編 1970『改訂版 東洋古銭仙格図譜』万国貨幣洋行
 山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会 1975『山形市史 下巻 近代編』p.87 山形市
 山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会 1982『山形市史 年表・索引編』山形市
 山形県 1988『山形県史 年表 別編Ⅲ』
 山形市教育委員会 1996『山形城跡本丸廻発掘調査報告』
 山形市教育委員会 2000『史跡「山形城跡」(三の丸) 整備基本構想』
 九州近世陶磁器学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
 東北中世考古学会編 2001『中世の出土模範』高志書院
 永井久美男 2002『新版中世出土鉢の分類図版』高志書院
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2004『飛泉寺跡道路発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第134集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2005『山形城三の丸廻発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第142集
 高橋拓 2009『東北近世窯における窯道具の転換的原因』山形大学歴史・地理・人類学論集第10号
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012『山形城三の丸跡第5・7・8次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第202集
 山形市教育委員会 2012『史跡山形城跡(2011～2012) 本丸西堀・西土塁跡発掘調査現地説明会資料』

写真図版



調査前全景（西から）



西区基本層序 a-a' (西から)



東区基本層序 b-b' (南から)



T4 層序 c-c' (西から)



T4 完掘状況 (北から)



SK1 土層断面（北から）



SK1 完掘状況（北から）



SK14 土層断面（北から）



SK14 完掘状況（北から）



SD2a-a' 土層断面（南から）



SD2 完掘状況（南から）



SD2b-b' 土層断面（南から）



SD2 完掘状況（南から）



SK18 土層断面（東から）



SK18 完掘状況（東から）



SK47 土層断面（南から）



SK47 完掘状況（南から）



SK49 土層断面（南西から）



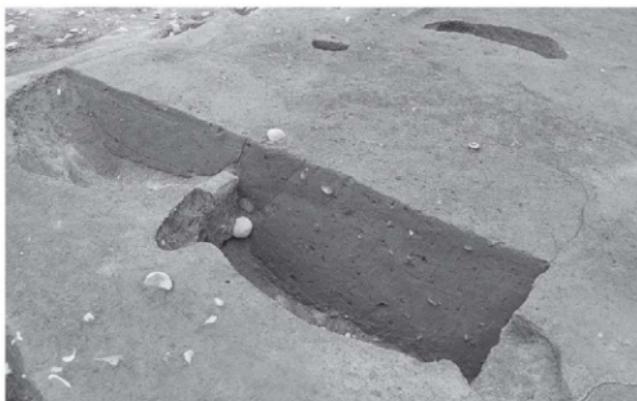
SK49 完掘状況（南西から）



SX23 土層断面（南西から）



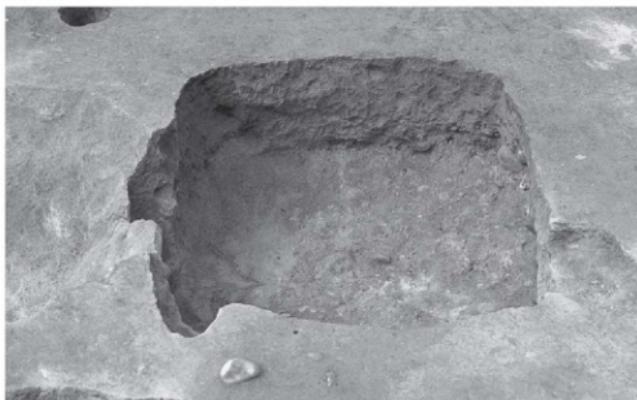
SX23 完掘状況（南から）



SK58・59・SP75 土層断面
(北東から)



SK58 完掘状況
(東から)



SK59 完掘状況
(東から)



SK62 土層断面（南東から）



SK62 燃焼部（北から）



SK62 完掘状況（東から）



SK63 土層断面（南東から）



SK63 完掘状況（南東から）



SK64 土層断面（東から）



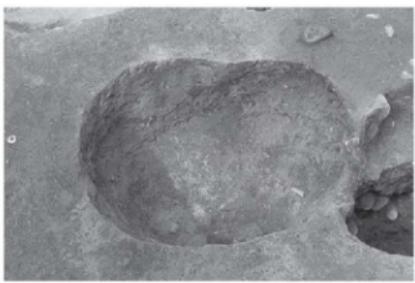
SK64 完掘状況（東から）



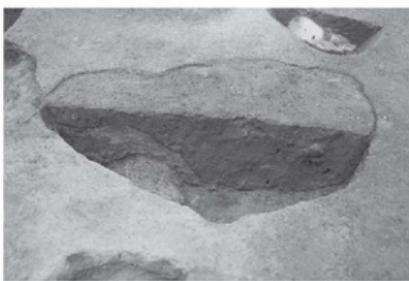
SK64 遺物出土状況（東から）



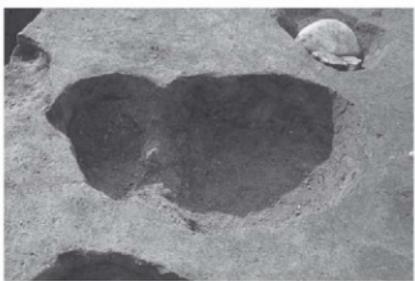
SK65 土層断面（南東から）



SK65 完掘状況（東から）



SK67 土層断面（東から）



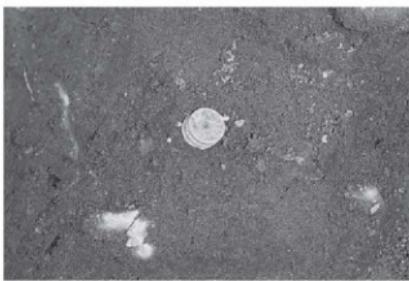
SK67 完掘状況（東から）



SK82 土層断面（東から）



SK82 完掘状況（東から）



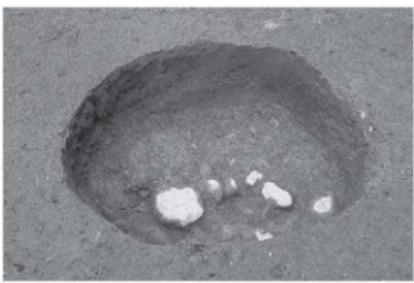
SK67-RM15 出土状況（東から）



SK82-RM11 出土状況（東から）



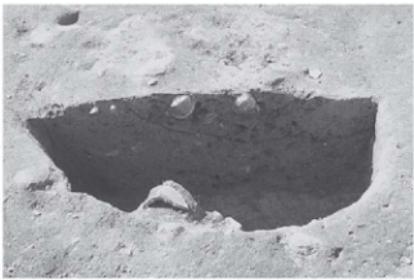
SK89 土層断面（東から）



SK89 完掘状況（東から）



SK89-RM16 出土状況（西から）



SK98 土層断面（東から）



SD9a-a' 土層断面（南から）



SD9b-b' 土層断面（南から）



SD9b-b' 土層断面（南から）



SD9 完掘状況（南から）



SD61a-a' 土層断面（西から）



SD61b-b' 土層断面（西から）



SD61 完掘状況（西から）



SX3 検出状況（北から）



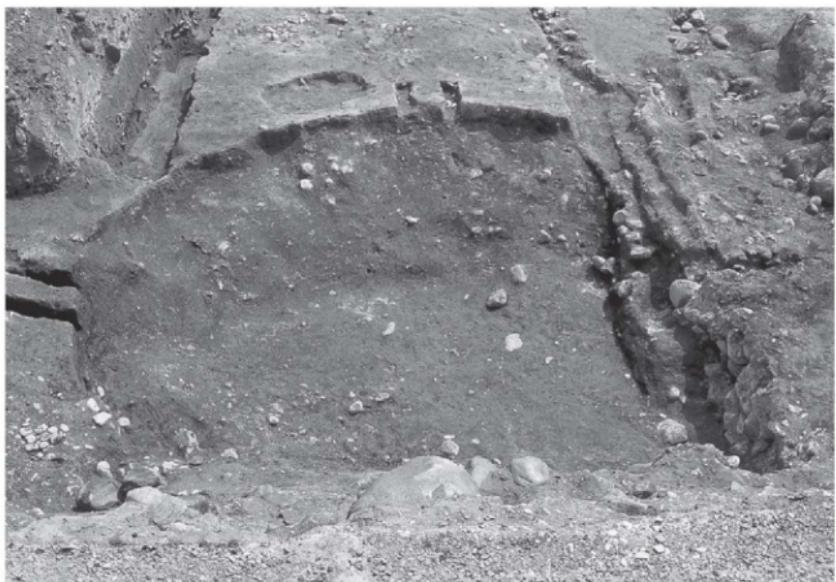
SX3a-a' 土層断面（南から）



SX3b-b' 土層断面（南東から）



SX3-RM3 出土状況（南から）



SX3 完掘状況（北から）



RQ1 出土状況（東から）



RP2 出土状況（北から）



RM5 出土状況（南から）



RM6 出土状況（西から）



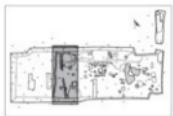
RM7 出土状況（東から）



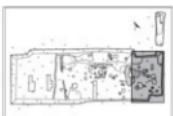
RP8 出土状況（東から）



RQ9・RM10 出土状況（東から）



西側完掘全景（北から）

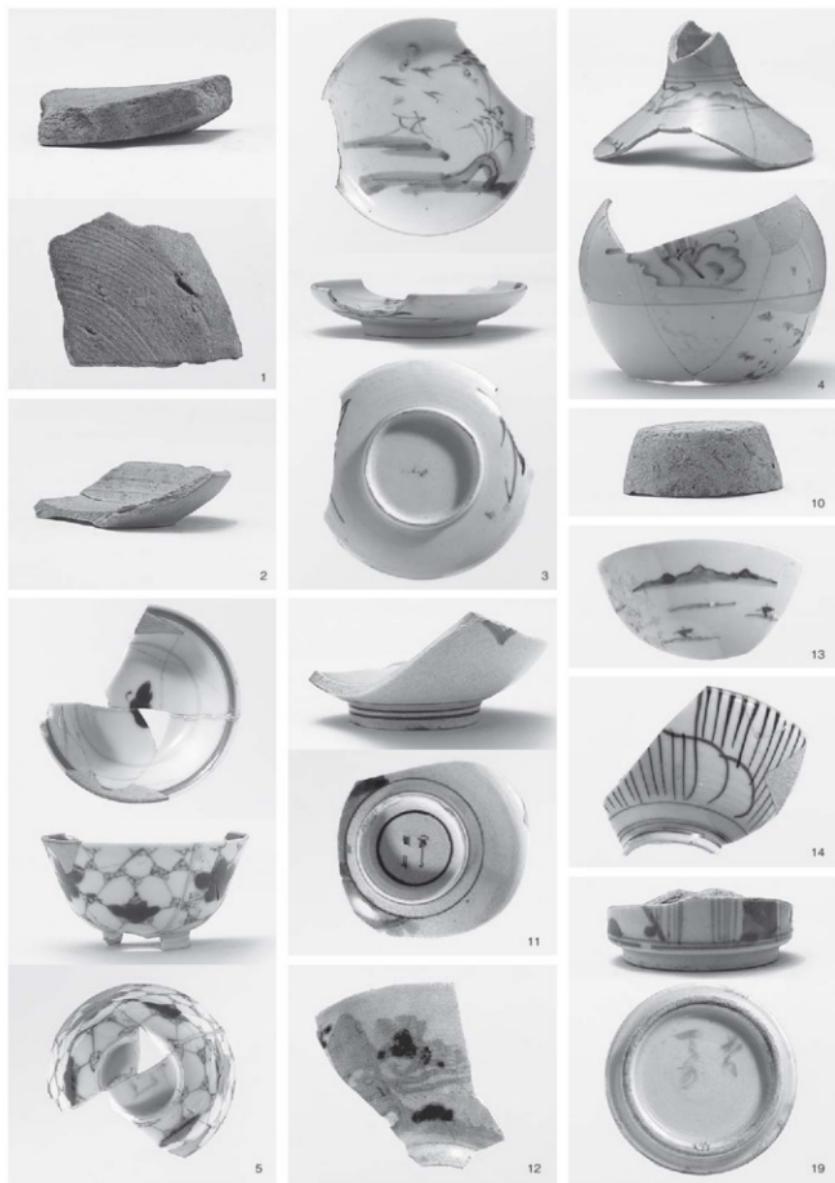


東側完掘全景（北から）

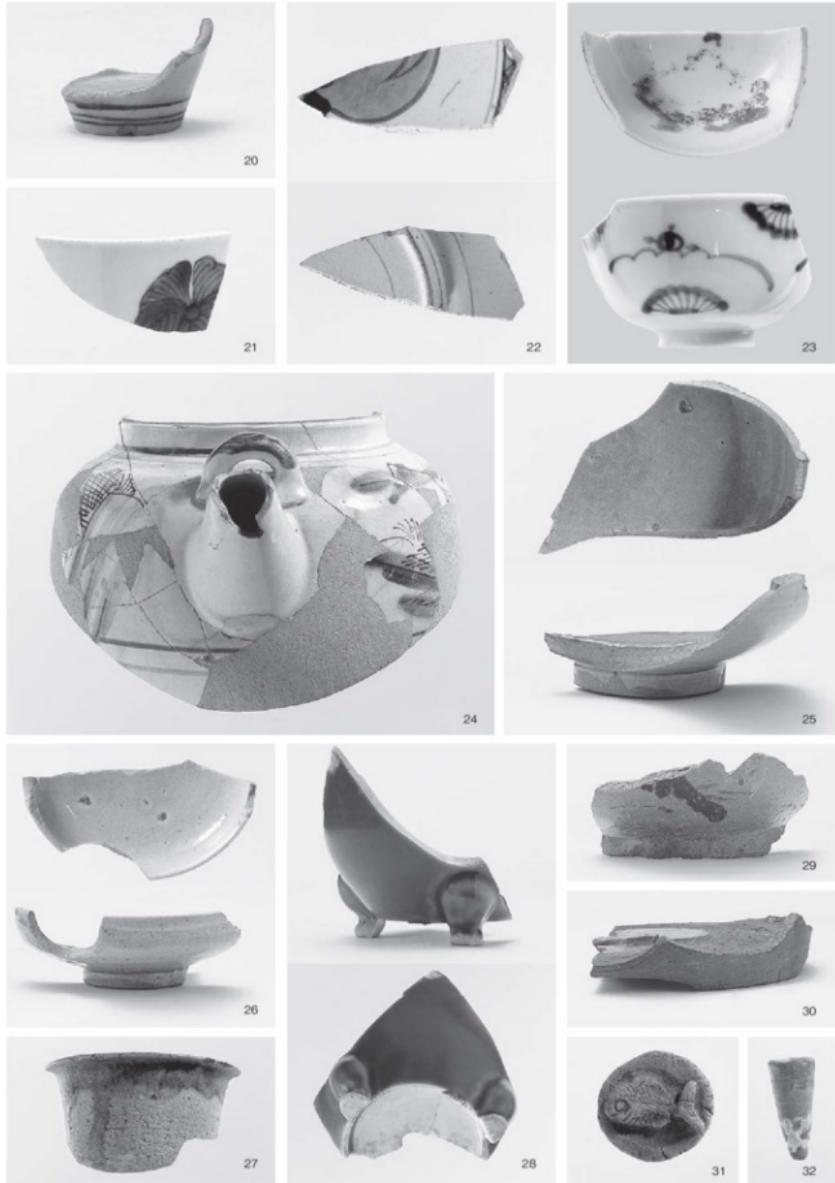


中央部完掘全景（西から）

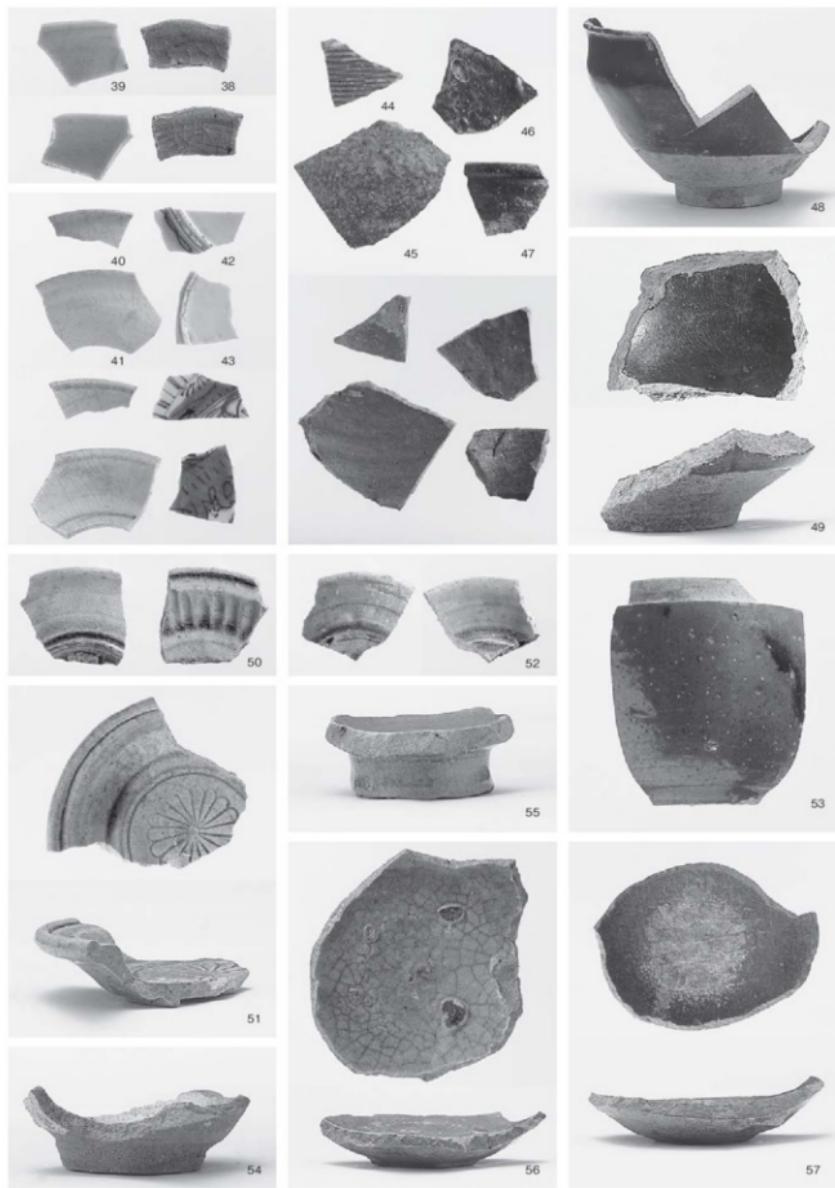




遺構出土遺物（磁器・かわらけ・土師質土器）



遺構出土遺物（陶磁器・土製品）



遺構外出土遺物（青磁・陶磁器）



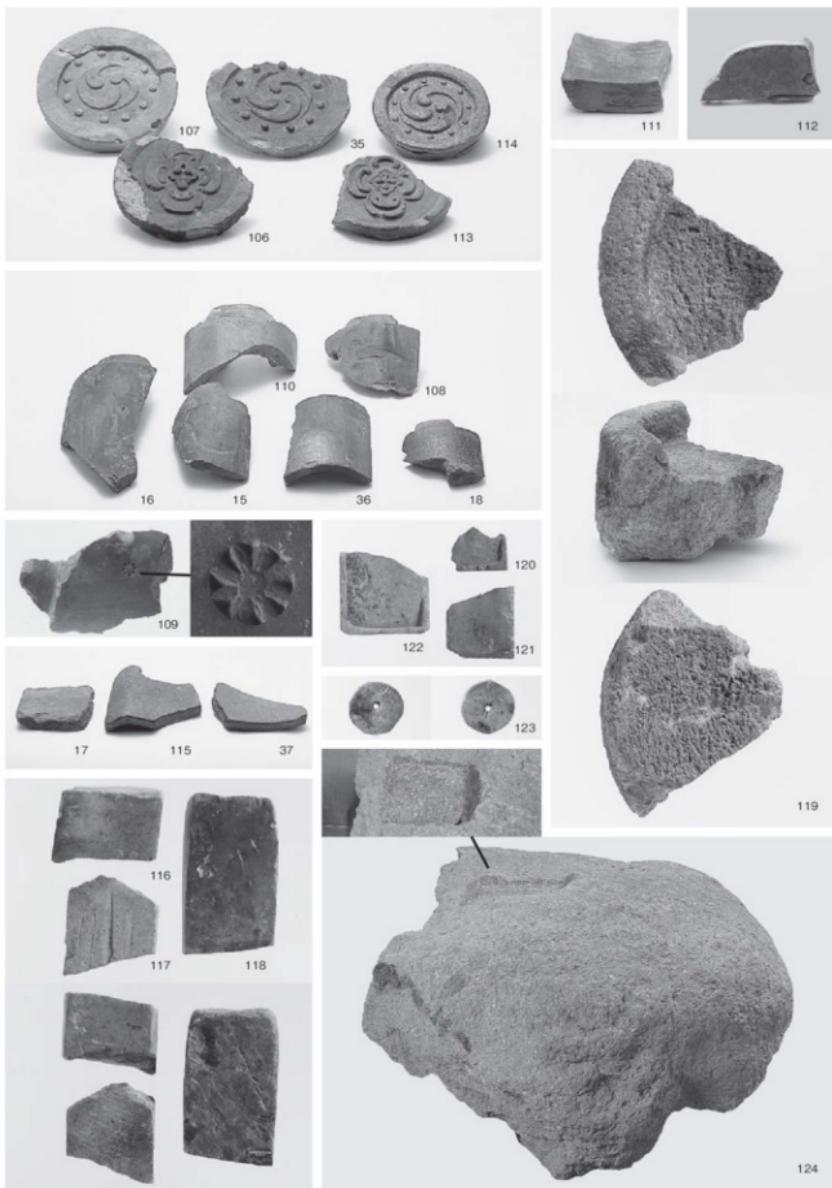
遺構外出土遺物（陶器）



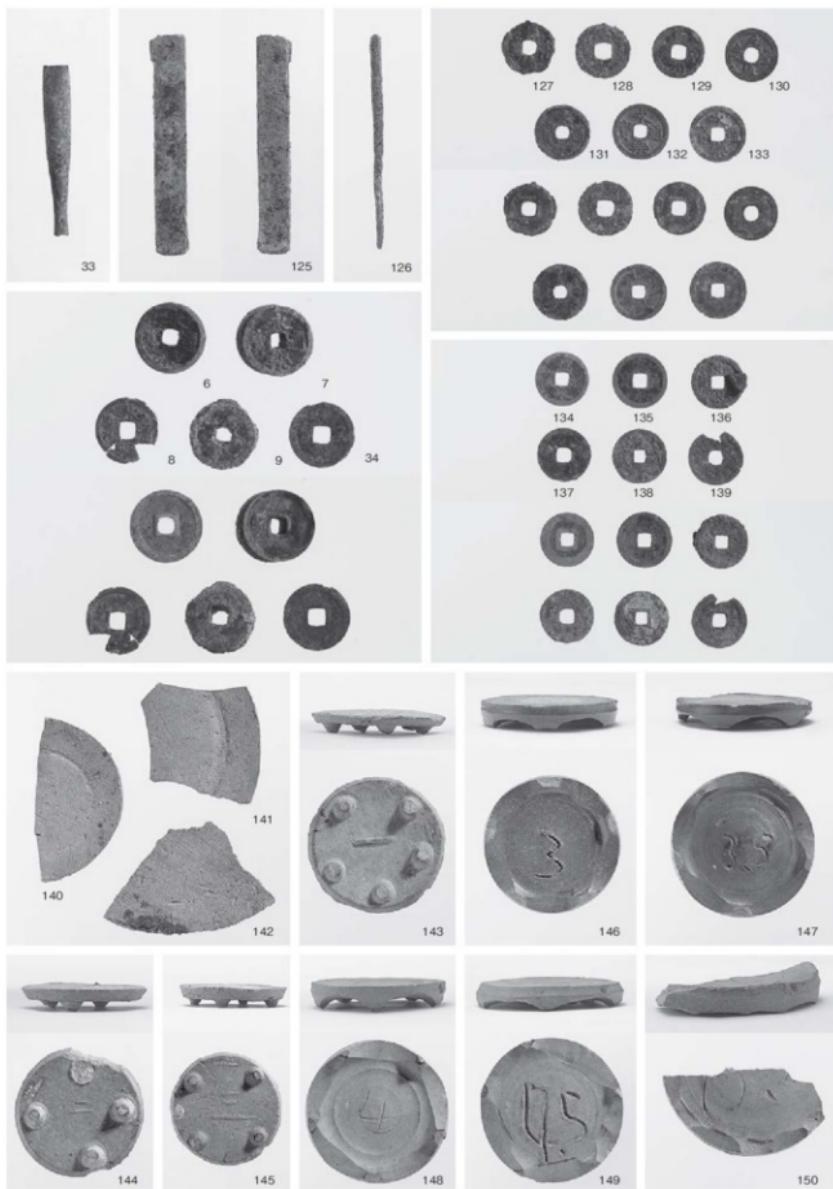
遺構外出土遺物（磁器）



遺構外出土遺物（磁器・かわらけ・土製品・土師質土器）



瓦・石製品・礎石



金属製品・焼台



近代の陶磁器・ガラス製品



「山形城周辺空中写真 1956.5.8」
国土地理院所蔵の米軍撮影の空中写真を掲載したものです。



山形城最後の城主水野家の家老「水野三郎右衛門宅跡碑」

報告書抄録

ふりがな	やまがたじょうさんのまるあとだい 12 じはくつちょうさほうこくしょ
書名	山形城三の丸跡第12次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第214集
編著者名	氏家信行 山田めぐみ
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608 TEL 023-672-5301
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
やまがたじょうざん 山形城三 のまるあとだい の丸跡第 12 次	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 おおむち 大手町	6201	201-009	38° 15' 19"	140° 20' 1"	20120611 ~ 20121005	910	山形法務 総合庁舎 新営事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
やまとがじょうさん 山形城三 のまるあたがい の丸跡第 12次	城館跡	近世	土坑	27	瓦 礎石 土師質土器	
		?	溝跡	3	かわらけ 陶磁器	(文化財認定箱数: 35)
		近代	性格不明遺構	2	古銭 煉瓦 焼台	

要	昭和13年まで建っていた刑務所の影響によるものか、かなりの深さまで削平を受けていたが、地表下約160～180cmの深さから土坑、溝跡、ピット等の遺構が検出された。しかし、遺物の出土が少なく時期・用途は不明。但し、調査区の埋め土から瓦、礎石、古銭、陶磁器、煉瓦など山形城や山形刑務所に関係すると思われる多くの遺物が出土した。
---	---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第214集
山形城三の丸跡第12次発掘調査報告書

2014年3月31日発行

発行 公益財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒 999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608
電話 023-672-5301
印刷 田宮印刷株式会社
〒 990-2251 山形県山形市立谷川3-1410-1
電話 023-686-6111

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 214 集

山形城三の丸跡第 12 次発掘調査報告書

付図 遺構配置図

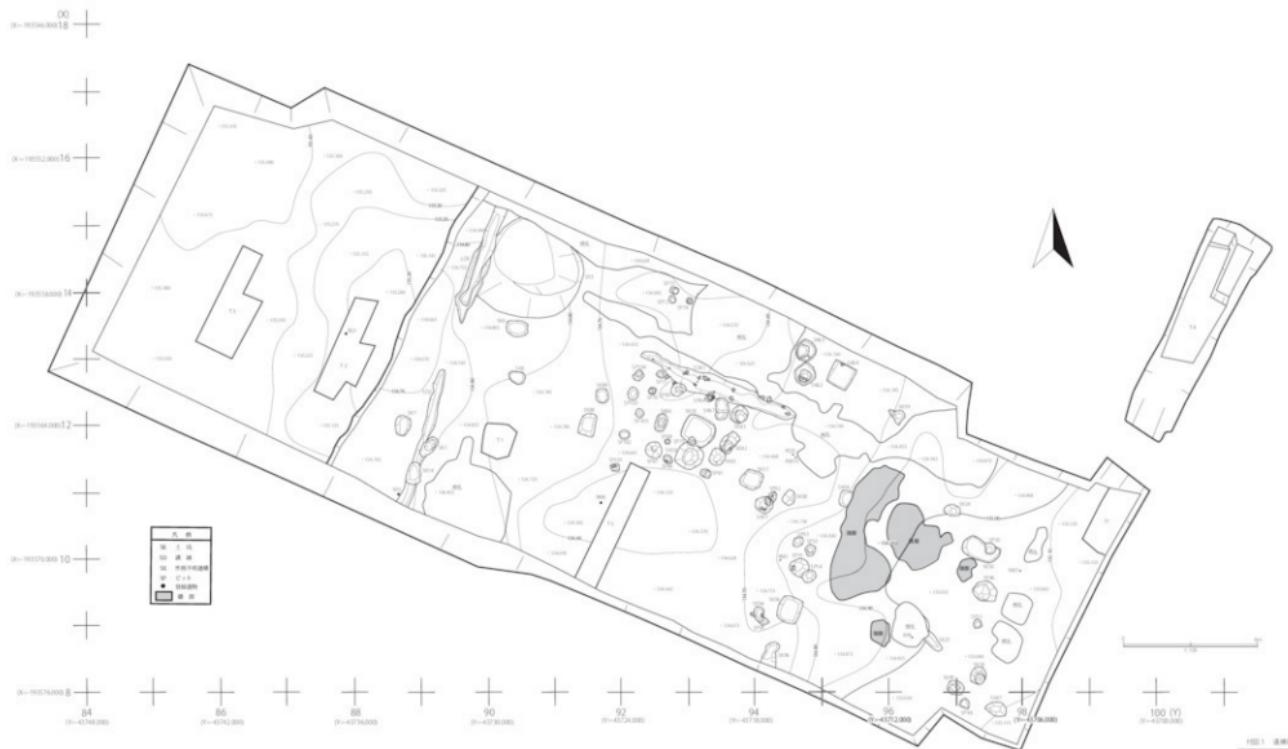


图1-1 该地地形图
1:100000